りて外の卷の封を切れば、これも同樣文殼束。もしや奥にもと笋の皮を剝くごとく、心を目的に引裂き、引剝けど、いかな事！　文の外はなかりけり。女房堪らず牛狂亂になりて手傳ひ、瞬間に殘る五卷をも一引解いて見たれど、十錢札の截片だに飛出でざれば、夫婦呆れて、呆れて、呆れて、腰の拔けざるこそまだ〳〵不思議なれ。女房わつと泣出して、繻、繻、繻子帶……。　えゝ、不吉な、泣くな。なほ、不吉な、帶の事などいふな。　いはいでか、いはいでか。あの老女め……。　何と？　否、何、あの、叔母樣め、平常御殿の自慢いうて、お殿樣が御大氣の、お奥樣がおやさしいの、いろ〳〵の下賜物が、つもりつもつて、金子にすれば何千圓。それもこれも其方達夫婦が、やさしうして〳〵れる禮までに、わが歿後は二人の此有にならうぞなどゝ、屋敷あがりは皆赤田螺と思の外、甘い事ずくめの談話を、無根にしても十分が一の物はあらうと、親身の母親同樣に世話したりしに、長命のしすごしから、持物をみな沽却して、紀念というてあれは何ぞ？　よくぞ恥かしくもなく出された羊羹色のぴり縮緬、大御所樣時代の振袖か、茶番の外に何時誰が被るものぞ。平常の御大層なる口上に合せて、あれしきの紀念がはづかしければ、證文一つなき文反古を種にして、うま〳〵手品をつかうたは、惡さも惡き虛言吐婆！　えゝ、腹が立つ、

業が沸える、此方は癪にも障らぬかいな？　死んだものでないならば、逐懸けて摑み着き、白髮を引拷りて咽喉に嚙着き……。　えゝ、この馬鹿ものめ！　血迷うたか、よまひ言も節にせよ。　あゝ、血迷うた、血迷うた。繻子の帶が口惜うござんすと、身悶して泣入れば、その勢に膽をぬかれて、清四はいよ〳〵惘となり、目瞬ばちり〳〵と文殼を眺めながら、虹のやうなる息を吐きぬ。猶未練ありて文庫の中を覗けば、底側にぺたりと密着たる一通あるを、もしやと取上ぐれば、叔母の手跡にて、書遺の事と認めたり。公債證書でなくば見たい事もなけれど、尋常事ならぬ遺書といふ字に、心牽れて之を披けば、

一筆申のこし候。此中の文がらは、お國元の定已樣と年來とりかはせしものに御座候。申するはづかしき事には候へども、私御殿へ御奉公中、十八の年より定已樣に馴初め、末はかならず〳〵女夫と、淺からず契りまゐらせ候ひしが、とても添ふことかなはぬ譯有之、死ぬよりつらき思にて緣切りは候もの〻、貞女兩夫に見えずとの敎もあり、なほまたありし夜の契のほども思ひ申候へば、只この人こそ戀しく懷しく候へ、外々の男に添ふ氣はさら〳〵ござなく、それゆゑに一生奉公を思立ち申候。その後定已樣はさる方と

文ながし

御祝言なされ候へども、まへ〳〵の約束にて、行末ともに此身の忘れぬ證據とて、月に二度づゝこまぐ〳〵との文を下され、私よりも返事をさし上げ、逢ふにかへてかくはかなき首尾をたのしみに暮しまゐらせ候。十九の年より一昨々年七月、定巳様あの世へ御先立なされ候ひしまで、月々おこたらず御音信有之、私は東京住居、定巳様は御國元にて郡役所の小使を勤めらるゝ御身とて、御出京の御暇もなく、私とても老年まで御屋敷に上りて自由ならぬ身なれば、御目に懸りにも參りかね候まゝ、五十年が間文通たえず、只々こがれ居りまゐらせ候へども、かはらぬ御志のほどは文にていつも嬉しく覺え參らせ候。いよ〳〵私事も此世は今日明日に御座候へども、定巳様未來にてさだめし御まちかねなされ候はむとぞんじ候へば、臨終いそがれ申まゐらせ候。扨とやこの文は戀しき人の筆の跡、心のまことにも候へば、火を懸け候はむも心苦しくて、かくとりおき申候ものゝ、御前様方に見られむは、亡なりし後までの物笑と、まことに〳〵恥かしくぞんじ候へども、この文の始末頼みあげたきまゝ懺悔いたし候、此上は人目にかゝらぬやう、そつと川へ御流し被下度、くれ〴〵もねんじ上げまゐらせ候〳〵。

（其一）すさまじきもの（上）

勇者も大晦日は恐しといへり。三百六十四日が間、天にも地にも繕ひし襤褸、今日只一日に出で、世間は苦しき人九分九厘と知る可し、此夜の十二時は尋常の薄暮ほどにも思はれず、商人の店には洋燈の數を増し、高張に景氣を添へて、丁稚も居眠らず、買人もまた夜深を厭はずして、黒豆、照五萬米、調へに、今頃行く女房の家の有様、さこそと思はれて氣の毒なり。大路は晝にまして賑はへど、小路へ曲れば商家少く、家々の大戸はたとさしこめ、明窓の障子に火影華やかに映り、時々笑ふ聲戸外に漏くは、羨ましさの限にして、かゝる家の戸口には、初春の神立草臥れたまふと覺し。其二三間先に格子戸造に外面を固め、出入口はくぐりの一枚障子、丸の中にトの字を筆太にかきて、其下に吉田屋と家名を添へたり。内には人聲靜なれど、此五六日は人出入わけて絶間なく、士農工商、老弱男女をきらはず、此門に立たば日本の風俗一目に見らるべし。十露盤の玉音ぱち〳〵とひゞき、錢の音もすなり。これぞ世間無二の重寶屋、不善の御用達、七つ屋といふ店と聞えぬ。格子の内一坪を石土にして、腰かけながら手あぶりの獅噛火鉢、眞鍮の熱を持たぬほどに炭團二ついけて、高帽子いかめしき髭男が火

箸に兩手を重ね、目鏡の下より番頭を覗きて、傲慢らしき高笑、主人は强慾なる面して帳場格子の中に構へ、厚やかなる帳面を繰廣げ、墨だらけなる軸の古筆を一文字に唧へ、蚤取眼のせはしげなる傍に、十三四の小丁稚が土藏への往來、水鳥の足より絶間なく、反古紙包を二つ三つ肩にして鐵行燈をさげ、出て來るかと思へば坐りもやらず、今一人の丁稚が紙捻十文字にかけし紙包を、四つ五つ抱いてまた土藏へ運ぶなり。店に腰かけし五六人に浮いたる顏色少く、されば浮いたる話は更になくして、物いふかと思へば情なき事を哀れげにならべて、とかく主人を口説きぬ。一時過ぐる頃は客も一人になりて、番頭も欠伸を呑む時、入口の障子を細目にあけて、其人すぐには入らず、丁稚首をのばして何方樣と、聲をかくれど返答なく、細目の間より、なほ家内の樣子を隙見するらし。

(其一)すさまじきもの (下)

番頭の目配せに丁稚飛出し、格子戸がらりと開くれば、戸外の人一二尺横に退きて、小陰へ忍ぶこそ怪しけれ、丁稚首を伸し、何方樣でございますといへば、聲を低めて、混合つてゐますかと尋ぬるに、是はお客樣と丁稚は此方へお入りなさいましと言捨て、番頭の傍へ來て、囁けば、首肯きぬ。やがて入來るは束髪十七

八の娘なり。色白の圓顏まんざらならず。會釋小聲に閾を跨ぐ木履の塗兀げ、足袋の色も清かならず、博多結城の綿入に、黄八丈の長羽織を重ね、縞繻子の帶は大分古りて、胸の下に皺深く、これに鶸茶色の丸紐の帶〆して、水淺黄地のめりんすに鳥蹄を赤色まじりに染めし半襟に、是はよして欲しき洋金に銀色の蓋をいれたる牡丹の衣紋留して、頭巾も冠らず、シオルも被がず、夜風に亂れたる髮の毛を掻上ぐる手頭を見るに、ありてよかるべき指環は見えず。左脇に紫の大きなる包を抱へしまゝ片隅に腰を懸くれば、居合せし一人の男客、稀有な顏してじろ〳〵見れど、其娘は一向見ぬふり、番頭の挨拶を無言にうけて、これをといひながら包を出せば、解きて見るに、(スウ井ントンの文法書、ナショナルの第四讀本、源氏物語講義の合本、本朝文範、袖珍英和字書)何程御入用と尋ぬれば、何やら答へしやうなれど聞取れず、何程と重ねて問へば、娘は無理に咳拂して、壹圓といふ。尋常の男ならば、何も言はず、壹圓、易い事とつひ言ふべき所なれど、商賣づくなれば鬼にも家暮にもなりて、壹圓とは滅相なり、六十錢ならばと字書を開けたり閉ぢたりして、返事を待てど無きほどに、風呂敷を擴げて書物を包みにかゝれば、首を垂れて思案せし娘は、右の袂より、汚れし白地に黑の翁格子の絹はんけちに包みしものを取出し、そんなら此を

添へてといふ。番頭心得て解いて見れば、緋唐子の帶上なり。それとても中古にて結目黄ばみたれど、此を合せなば萬更ならぬを、外面に見せず、毎度のお顔ゆゑと恩に衣せ、澁紙張の笈より新しき壹圓紙幣をつまみとり、兩面あらため、ぱり〳〵と音させて渡せば、手早く帶の間へおしこみ、其風呂敷も預つて下されと行き懸くるを呼び留め、この七月の銀時計と金の指環は。何時うけて下さるやと問へば、今月中には必ず出すべき心なりしが、都合ありて思ふにまかせず、來月は早々うけむといふ。それはよろしけれど二月分の利子を。それも知らぬではなけれど都合ありて思ふにまかせず、何事も來月にして下されと遁ぐるがごとく歸りぬ。客の男膽を消し、我廿六までは臆病にて、實置くといふ重寶な事を知らざりしに、世には可恐しき娘あり。彼は何處の女と尋ぬれば、さる女學校に寄宿の身、故郷は三州の豐橋とかにて、お名は申さぬがお客樣への忠義、國元には母親と兄あり、田地も少しは有りて五人六人の口に狼狽ふる樣な身代ならねば、あのやうに娘を修業によこして、月々のものもたしかに仕送らるゝよしなれば、あれほどの難義をするやうな不始末はあるまじきに、それには事情ありと番頭がいへば、亭主は帳面つける手を休めて、金さん世界は色さねと笑へば、ちげえねえと客は膝をたゝきぬ。

(其二)あさましきもの　(上)

入谷にて見し朝顔は輪大きく色濃かにして、我垣の物のたぐふべきにあらず。隣家のはいかにと覗きしに我のと少しも變らず。主人を呼立てゝ、此花がかねてお噂の(狂獅子)かと問へば、頭を搔きて、種は正眞紛れなしの(狂獅子)、此地は土瘠せたるが上に培養もせねば、見らるゝ如く江北の枳殼と申す。なるほどなるほど、系圖の一卷とり出せば、たしかに先祖は八幡太郎義家公、其後胤でありながら、冠は戴げず、お、こしの飯臺を傾冠の頭に載せて、母人に伴させ三味線ひかせ、われは太鼓打鳴らして、よか〳〵と子供をたらして、五厘六厘に頭を下げ、萬事さもしいづくめ、此等はまだ〳〵正しき營業なり。某藩の奥女中がなれの果、轆轤首の見世物の三味線ひくも心がらかはしらねど、さもしさ過ぎて哀なり。ゆすり、かたり、引剝、盜人は、男のやくざものが末路にきはまり、藝妓賣女はいたづら女の果に定めたり。氏も素性も何かすべき、食ひ兼ぬれば黑いものも白く見え、人の心自然と淺ましくなりて、我知らぬ間に所業不善不德に落ち、つひには其に染みて天晴不義の人間になりすます事、朝顔の種にはよらぬ如し。

しげきものは丸の内の靴音、猿樂町の私立學校。大路をそれて横町でみ〳〵と狹く、菓子麵包屋と古道具屋

の裏の奥に只一軒の貸家あり。此一月前引越せし人ありて、入口の木戸に杉板の看板かけて、英漢數學教授郁々學館と一六流の筆意、紙札をさげて本月入學の者に限り無束修と認めたり。

半月ばかりはひやかしにも規則見にゆく人なく、あれにて能く立行くと近處にて怪みしが、此頃にてはいかな事！　朝は九時頃より人足ひきもきらず、夜は十二時過ぐる頃ぞろ〳〵と歸る樣子、大凡一日に五六十人は、いれ替り立替り出入ると覺しと、近處のもの不思議がりぬ。此あたり一面ともいふべき學舍の數の中人出入の少し賑はしきは、一軒か二軒なるべし。夫さへ煉瓦のアヽチ見事に構ふるか、ペンキ塗の大門いかめしくして、一週に兩三度も門口に掲示を新しく張替へ、懇篤に教授す——月俸は何程——校費はなし——英人某などゝ、まねきをするが上に、新聞廣告も折々するやうに勉めねば、いつが日生徒の減るやら圖られず、幹事校長の心勞一通りならざるに、此はまた無爲にしてこれほど化すを見れば、名を匿す大先生にやあらむ、腕前ある人の錢金ずくならぬ仕事なるべしと、誰も彼も言合へりけり。

日を經るほどに入學者の數まして、此頃は入口にいつも手車一二輛づゝ待たぬことなし。身分ある人の令息などが高名を聞傳へ、かくは出入したまふか、われらも學者にならざりしことの今更悔しと、表の古金屋

の老爺はいひき。

（其二）あさましきもの　（中）

郁々館の建家廣からず、二階は四疊二間、下に講堂と名くるは六疊四疊二間打拔にして、教師の書齋と食堂と居間をかねて、三疊一間の外には物置もなければ玄關もなく、生徒の控所が二階なるもをかし。教師は三十四五の髭のある男にに、色淺黑く眼つき聰く、辯舌爽かに講義は滑稽まじりで上手なりといへり。床几形の長机を三側にならべ、生徒は坐りて席につき、教師は別に縱の机の前に、四方栗のブリキをとしの小火鉢を控へ、奉書紬の黑の一つ紋の古羽織を着て、貧乏ゆすりをしながら、講義の中に（さりながら）といふ口癖あり。生徒はいづれも不行儀にて、前の側に居ながら歷々と胡坐かき、方程式を教師に說明させて、我はマッチを摺りてカメオをくゆらせ、或は袂よりスコッチミキスチュアをとり出してぼつ〳〵と嚙むもあり。後の側の隅に二人引附いて、りやん拳藤八、さすがに柳はつゝしむこそ殊勝なれ。教師は一向見ぬふりにて、熱心に自身だけは說明すれど、腹司ふくやかならぬかしていつも不說明の說明、それを生徒は解せしやら解さぬやら、問返すものは只の一人もなく、一時間もたゝぬにごちや〳〵と課業すめば、我勝

に二階へかけあがりながら、(惚れて通へば)と小聲の甚句、入違つてどか〳〵とおりくる五六人の授業の模様、微塵前に變ることなし。此通りにて朝より夜更まで追通し、通學の目的はいづれを見るも修業ならざる如し。

二階へあがれば萬事氷解。其四疊の間は造作小綺麗にして、壁には一面の月琴を掛けて、窓の外に二つ三つ鉢栽をならべ、片隅に化粧道具を置き、長火鉢の脇には勸工場仕入の茶盆筍、後には鼠いらずありて、德利皿小鉢を座敷にちらし、鮨、菓子の食殘しを片よせ、四五人車座になりて一同眼まで赤くし、妻楊枝を嚙みながら、中に一人の娘をとりこめ、頬をつき、膝をつめり、果は同士打、同士惡口、美人が今の一語はたしかに一合を直値するぞ。武田一合買へと、寢そべりながら二十四五の蚊がすりの羽織きたる男がいへば、君は今足で彼の膝をついたでないか。その罰として酸鮪を奢れといふ。賛成々々と皆罵るほどに、かの男起上り、魯西亞革の紙入より、二十錢札を出して、これで半分といへば、哀な事をいふなとしかりつけ、又何程か集錢して、其中の無錢の男が奔走官を命ぜられ、いそ〳〵と二階を下りぬ。

その娘は十八九と思はるれど、小造の德には十七ばかりに見え、上品なる高島田に前髪ぶつくりと取り、

色菅糸を根懸にして黒塗蒔繪の木櫛、簪は銀足に金水晶は誰かの遺物なるべし。黄八丈の小袖に羽織は空色のきぬ縮、帶は黒繻子と友禪の腹合せ、おやしき風につくり立て、立居、物ごし、優しく、顔は細手に色白く、鼻の形惜しい事には少しまづけれど、眼元しをらしく、強ひてするにあらぬど性來の色眼づかひに、物を見る眄に千萬無量の情漂ひて、此にちらと見らるゝを(惱殺)などゝやいふべき。

規則見に來る書生には、此娘應接にまかり出で、三指にてはぢらひながら返答しとやかに申せば、皆肉を蕩かし、わが骨を抓むで歸るとかや。授業まつ間には香煎湯を出して、口數さかぬ愛想を、virgin と喜悅の眄を引下げ、お顔見たさに我もくと入學者引もさらず。

(其二)あさましきもの　(下)

朝七時頃教師は彼の少女と二階にて前膳の朝飯、箸とりながらの雑談聞けば、樣子はさらりと知れたり。鷄の胸に玉子を半熟にいため、その鐵鍋を火鉢の脇にかけて少女に給仕させながら、かの事はどうしたといへば、香の物につけし箸を休め、もうわたしはあんな事はいやでございますといふ。いやならば此後はさせまじけれど、今度だけは甘く頼む。御承知遊ばして來週の日曜日までには、屹度屆けるとおつしやりまし

た。よし〳〵お手柄〳〵。扨今一つの一條はと問へば、少女は顔を赧らめ、あの事ばかりは兄さん許して下さりまし。お言葉を背くではなけれど、餘りと申せば人外なり、今する事さへに心羞かしければ、一日も早くかゝる業はともく〵廢止にして下され、草葉の蔭にて父様母様が、定めし睨めてゐたまはむかと、夫を思へば情なくなりまする。ようこそ申したれ、我とて其始はかくさもしき事を働かむとは思も懸けざりしが、通學の書生どもが御身の色香に迷ひ、われ學問の未熟なるにも拘らず、此頃の生徒の數、みな是御身ゆゑなり。かりそめにも學校の控所が、稽古所湯屋の二階めきて、酒を食ひ謠を唱ひ、あられもなき亂脈亂ちき、我何とて快かるべきや。されども此ゆゑに月々の實入多分にありて、下谷に住みし頃は米薪に今日を逐はれ、われら二人がどろ〳〵せし木綿物にくるまりし昔を思へば、店屋物に新獨活のつけ合せだに食殘し、飯が白いの黒いのと贅な事をいひながら、月々若干か郵便局に殘りゆく今の身の上、有難く勿體なき事なり。さればこそ心よからぬとは思ひながら、御身を囮にして若き男をたらし、情こそ賣らせね、人の玩弄物にさせる事、みな此兄の不所存不了簡なり。一昨日話せし如く、かの人は新華族某殿の長男、これも御身に焦れ、わけて心を碎くと見てとりしゆゑ、他日の榮華を目的に、昨日は靡けと勸めしは、いひ譯

なけれど兄が誤と悟りぬ。もはや誰にも靡きたまふな。其内にはよき緣を求めて御身を片づけ、われも眞面目に教授するか、商社へなりと傭はるべし。それも今日明日とゆかねば今少時辛抱して、大勢に不興な顔見せてくれな。夫にしても今日に限りていかなればかうした事をいふぞ。されば、此事は今日思立ちしにあらず、茶をいれよ、酌せよと人のおもちやになるにつけ、貧すればとて淺ましやといつも思はぬにはあらねど、あなたの心を汲み、明日の活計を慮ふれば、娼妓になり下り、萬人に肌身を汚さるゝ女もあるものをと、無念の涙をのみて、夢に兩親ゐませし日の榮華を樂み、今日が日までは何も世渡りと忍びたれど、昨夜梅の湯にて表長屋の人々に出遇はせ、われを矢場女の密賣のと、はづかしき噂をせられしに、いよいよ我身が淺ましく、たとへ食べずに死ぬもよし、ふつ〳〵此業がいやになりましたと、眞實の雫に可愛き眼をぬらし、思ひいつて頼みたるを、兄もさこそとよきやうに慰めしが、その後二月たてど少女は奉公にも出ず、半歳になれど緣をさがす模樣もなく、小川町邊のなんとやらいふ好男子が手にいれたなどいふ取沙汰もありて、此頃は其少女、黄金の指環二つはめて、兄人は奉書の古羽織を大名縞の糸織に着替へ、二階の押入に絹布の夜具が一組、天鵞絨のくゝり枕を二つ見しと誰やらが話しき。

紅葉集

（上）

我駿河町の呉服店越後屋に年季奉公の頃は、百人百色の合手に可笑き事あり。可悲き事あり、可喜き事あり、可憎き事あり。浮世を見通しの店頭に座りて、うかく と月日を過しぬ。

我直接に見もし聞きもしして、隨分新奇げに覺ゆるも、其を我口より語らば一向に骨も筋もなくて、お伽には成難き談柄のみなれど、數の中には一つ二つ物語るべき事なきにもあらず。

わかれ蚊帳

年は忘れたれど西南戦争中の春なりけり。世間何となく平穏ならねば、我店も平常に三分一の客足にて、多數の奉公人閑暇なれば、懸硯に頬杖つきて、隣なる忠吉が出商の掛賣帳調べて算盤弾くを呼留め、一寸見よ角の正八が處へ今腰を掛けし女中をといへば、算盤衝いて伸上り、どれ〳〵と、此男（近忠）と呼ばるゝ近眼なれば、眉間に不様なる皺を寄せて篤と眺め、彼は何者？　何者とは近頃薄情なる申分かな。修飾せずとも例の目鏡を掛けて、今一應たしかに見よといへば、懐中探りて取出せし目鏡を掛け、無遠慮にしげ〳〵と打眺め、小膝を拍つて、菖蒲か杜若か。似たも〳〵南瓜を割らで其儘なるべし。偽言にも我所思

を南瓜とは、了簡なるまじき所なれど、彼女を心づけくれし褒美に、今日は無難に許さむが……其はともあれ兼藏殿、姉妹の段にはあらで、見事其人其儘ならずや。他人の空似といふはあれど、是は什麼と見惚れたりしが、獨語くごとく、今月初には屹度顏見せてたまはれと、暮々もいひしを、安請合して行きもせず、沙汰もせざりけるが、元來、彼奴、心弱く、度量狹く、些少の事をも氣にする女なり。我にはぞつこん參りて、此顏さへ一目見すれば、いかな癪も血道もけろりと治るべき良藥男。寢ては夢、覺めては現、忘れぬまゝに思續け、我あるゆゑに苦界に苦を知らぬときまでの深間なれば、久しく打絶えしに可愛や病を起し、戀し〳〵の一念、形となりて、此處までも徜徉ひ來りしか、開闢以來の眞實女！　不便のものやと、丁稚の前も憚なく、入湯歸に覺えし豐竹のまがひ節。我は不思吹出して、好加減にせぬか、往來の人が笑うて通るわといへば、あゝ！　と太き溜息吐き、思ふまじと思へば、見たさ秘藏の寫眞をも取出さで、饑餓見るよりも苦痛を忍びて過ぎしが、今生寫の面影を見るにつけ、胸わく〳〵として此はならぬ。たとへ其人ならずとも、肖てゐることのゆかしさに、かの客我に來りたちむには、尺は思ふさまたつぷりにして、五寸とあらば五尺、一尺ならば一丈……あゝ、あの笑ふ口頭は、眼元はと、身顫して悅ぶ容は、亂心ものめと、

矢庭に耳を引かむとすれば、彼は引せじと打合ひ突合ひ、狂ひ興ずる耳根に、（こら）との一聲、百雷の墮つるがごとし。わつと驚きて振向けば、我前にいつのまにやらお客樣の御入出なり。衣紋繕ひてかしこまり、慇懃に挨拶して、ちとお掛けなされましと火鉢を推遣りながら其男を見るに、年齡は四十近の武骨一遍なる巖石造、體色赤黑くして古りたる銅のごとく、手足肥えたるにはあらねど、肉剛く筋立ち、むしやむしやと毛生ひたり。面長にして顴骨秀で、眉毛黑々と一文字を引き、眼釣上りて凄き光あり。七分苅の頭髮針のごとく立ち、腮髯縮れて渦を卷き、口髭長くして兩端は耳にも及ぶべし。段鼻高く下視きて、薄き唇は弧を畫きて常に鎖ぢたり、見るに可恐しきは肯隈の額際に蟠れる、じれて大喝の下には鬼も仆るべし。蚊がすりの長羽織に、やゝ同じ長たる博多結城の布子を被て、鼠縮緬の兵子帶を細く纏き、肌衣は縞フラネルの襦袢なり。霜降羅紗の獵鳥帽子を無造作に戴き、素足に疊附の駒下駄、握太なる自然木の洋杖を持ちて仁王立に立つたるに、御用のお品はと聞けば大股廣げて撑乎と腰を掛け、最上なる蚊帳所望といふ。

いつぞや秋の末に浴衣地買ひに御座られたる男ありしに、夏ならでは賣らぬよしを答へければ、東京は聞き

しに違ひて不便なる都會なりと、膨れて歸られし事を思出し、其も可笑かりしが、正月蚊帳といふも判じ物めきてと思ひながら、店に在るものならば賣りもすべし、其季々々の品物の外は御座なし、御氣毒樣なりといふ顏を屹と睨み、愚な事をぬかす奴かな。東京に越後屋といへば、日本國の津々浦々、いかな僻邑にまでも聞ける老舗ならずや。其に何ぞや、正月なればとて蚊帳一帳ないとは、扨々哀なる事かな。此分には、其抽斗の裡には紙屑などを入置き、遠くの棚に重ねたる反物類は、繪か但しは紙なるべし。適れ軍師！矢種を集めむとて藁人形を用ひし古の智略も思出されて、商人には近頃惜むべき才略家と可憎げに高笑すれば、我も勃然として、お國元などの呉服店はいざ知らず、土と黄金が同じ桝にて賣買なる都會の眞正中に此程の角地面引廻し、此日除布外しても大佛樣に夏冬のお仕着せなるべき大身代。まづ彼處なる屋根を御覽ぜよ、東都名所繪にても御存じ樣の鯱の手前、さるきたなびれたる商略は成難し。千張なりと、萬張なりと、蚊帳ばかりの土藏あれば、この夏は忘れずに瀛船に召して御座りませ。此店頭を大海原にしてお目に懸けましよと空嘯けば、其男立ちかけし腰を据ゑ、愉快、愉快！　さもあるべし。今のは過言なれば容さるべし。さほどある蚊帳を何爲又賣らぬぞ。されば其季の品に數を好めば、なか〳〵置く可き席なくしてと答ふれば、其もなるほど聞えたり。さりながら、我此度の買物は一期の思出、其方が手柄にて是非一張見せてくれよ。價金などは一錢も直切るまじとあるに頭を下げ、有難きお言葉なれど、その土藏にはしと斷りけるに、其男思案の體なりしが、此店の支配人なり、一番伴頭なりを呼べ、直々に談判せむとあれど、わづか蚊帳一張に支配人引出せとは大業なり。隨分呼びも致すべれど、別にお話もあらば我まで聞かせたまへ、可然申聞けむとの挨拶に、膝を向け直して聞かれよ仔細はと髭を拈りぬ。

（下）

我紀州和歌山の藩士にして、今年三十七歳。幼稚かりし頃は世上武人の習慣、思へば量見狹き事ながら、わづか一人の敵に向ふべき兵術を此上なき本技にして、兩親子心を勵せば、我も自ら擊劍だに上手とならば、御國の男子たるべく思込んで、他念なく竹刀を握りづめに、二十四の夏一傳流の達人となりて、他流仕合十本に九本まで負を取りたる事なし。遂には紀州家の名物男となりて、士分の中なる武士と、人も呼び自らも許しぬ。

維新の後は天、地となり、地、天と變れる世の樣、同藩に某の二人は、病身幽靈の如くひよろ〳〵と痩衰へ、箸二筋も持たしなば、指は折れぬ可き弱虫の腰拔ども、虛弱の身の堪へ難ければと、道場に足を容れず、竹刀のはしと擊合ふ音を聞くならば、我等が頭痛は立處に治るべきに、怖ぢ恐れて打仆れなむ用不立。しやう事なしに一間に閉籠りて、青標紙と睨合ひけるが、米艦渡來の後は窃に洋學に志すと聞くより、我等は居合腰に長柄を握りて、しや！　神州の民に洋夷の子分はなきはず、賣國の賊臣を斬つて紀藩の恥辱を未然に雪げや。合點だ、只一擊と手分して、其門々に三夜忍びて覘ひけるに、命冥加の奴輩かなと、切齒をして詈りける、某五郎何之助は、今いづれも政府樞要の椅子を占めて、高慢なる毘を揷撫づるを見る事の無念さ。同氣なりし隼人五人までありける中にて宋孔明といはれし一人が、今やうやく内務省の判任にこびりつきて、其外は語らむも不面目なり。これといふも機を見る眼なき我々が愚鈍なるによれば、誰を罵りて誰を怒るべき樣なし。我は覺の一傳流を、推擧の種に巡査を拜命し、させる功勞もあらざるに、聖恩恭くも警部の末に列しぬ。

流浪の折から妻を喪ひけるまゝ、今に不自由を忍びて天地間の一本立、命を捧ぐる職を汚せば、なまなか

羈絆なきを心安く、月給を盃にしたみて唯一息にぐうとやるを、今生の娯樂にして下宿の二階に煤り、來國俊を抱寢して愉快なる夢を見る事あり。

去年の夏詰所轉ぜし都合によりて本所に移住せしが、聞きしに優りたるは名物の蚊なり。住家は四壁を露出して家具といふものなく、ありけるも悉波にして、腹中に收めたるは、火用心を思へばなり。夜具とてありといふべき程あらねば、寒夜は霜に凍えて、かほどの勇者も得凌ぐべきにあらねど、好物の酒といふ物ありて、一盞引かけては、緞子の夜具も知らぬ暖氣に熟睡の魂魄や、こんな時を蝶といふべき。

夏はなほよし、赤條に踏反りたる胸毛に、螢の遊ぶなどは風流ともいふべし。冬のみは五合の貸蒲團に倩られて、これを一年中の可愁候と思ひけるに、此冬よりなほ可恐しきは本所の夏なり。日中も部屋の四隅には、雲霞のごとく鮫蚊群りて鯨波を揚げ、日暮に近けば貴皷を鳴らして、どつと喚いて八方より寄せ來る勢の凄じさには、體内の血も驚擾きて身毛彌立ちぬる心惡さは、黄巾の賊が幻術の毒霧もかくやらむと可恐し。前後に敵をうけて續く可き味方はなく、嘴襖を築きて貴立てらるゝに、烟の木は靈き、團扇の骨は折れ、宵の間の防戰に疲れて仆るれば、押重なりて毒嘴を突入るゝに、手足背面の嫌ひなし、一升の酒

一合の血となるとして、一夜に二合の血を吸るゝ無殘さ、迚も城郭の構なくして合戰は覺束なけれど、軍用足らざる身は心の儘ならずして、其一夏は夜毎の手合せに只の一度の勝なきのみか、いひ甲斐なくも滿身遁傷の苦痛に、この男が泣かざりし夜ぞなき。

其夜毎に思はざる事はなかりき、もし餘裕の金を得る事もあらば、必ず蚊帳一張は備ふべきものぞと。天なる哉、城郭成るべき時運到來して、我此度西南へ出張を命ぜられ、支度金若干を昨日賜りければ、かくは今日心願の蚊帳を調めむとて來れるものを、この胸中を察して勞を吝むなと語りぬ。

明日にも戰地へ打立たむづる身の、後の事はなか〳〵想も懸けざるべき際までも、忘れぬ程の苦艱はと、我も骨髓感じ入りければ、異儀なく承引きて此趣を支配人まで語り、土藏を開きて數の蚊帳を持出して見すれば、斜ならず喜びて四六を一張買うて歸り際、此人の住所姓名を尋ね、國家の爲には一命を忘れたまふべき折から、來夏を安らかに眠らむとの御用意は何事ぞ？　必ず命を全うして歸りたまひなむ御豫想なりや、什麼と詰れば額を撫で、蚊にだに惜まぬ血を國事にいかで、此蚊帳を求めしばかりに、不義臆病の心やあらむかと、貴樣が思はくも愧かしけれど、この夏發起せし心願の漸く遂げられむ時到りぬる嬉しさ

に紛れ、さる了簡は聊もなけれど迂濶と買取りたり。よし〳〵今生の思出に、今宵は此蚊帳に飽くまで寢て、立退際に城は宿の女房に渡すべしと、抱へたる蚊帳を物珍しげに撫でながら去りけり。

やがて逆賊誅に就きて、世は又靜謐となりけるに、一度の馴染ながら、兵亂の間も此人の運命を心に繫けゝれば、今は什麼、骨を曝したまひたるか、但しは勳章を輝かしたまふかと、一日本所の下宿を音づれ、女房に遇うて尋ぬれば、葛籠の底より泣く〳〵かの蚊帳を取出して、殘らでよきものはかく殘りぬ。

てんのし山〳〵、我に似た山だ、頭顱の少兀赤岩彈介、血氣盛に似合はぬ天性の律義とて、行〳〵に大道の眞唯中、行潦も避けては通らぬ男なりけり、ある日の暮町の風呂へ行かむと立出でけるに、蕎麥切屋の前を過ぐれば好物の香芬鼻を貫き、夜食前の咽喉鳴りてしきりに涎を催せば、大豪のものも之には勝てじと一文字に飛入り、參着三杯は上戸の掟、着あらしの箸の二乘けて、六膳と物しければ、腹の虫やう〳〵鳴を靜めぬ、勘定くれうと懷中を探るに、南無三寶財布を遺れたり、湯錢だけは袂に入れたれど其にては足らず、例の律義のこゝろにしては此時の想、鐵砲十八挺銃口を揃へておつ取卷かれむも及ばじ、計略爰ぞと思案に暮れたり、亭主に會うて仔細を語らば、何の事もあるまじきに、我は何人ぞや、武士たるものが蕎麥切の代錢に不足して、素町人風情に頭を下げむ事一代の恥辱といつゝべし、第一さばかりの用意なくして物食ひたるなむど、丈夫の心懸にはあるまじき不覺なり、傳聞く赤穗の四十七士は討入の懷中にそれ〴〵金子所持せしとて、今に良雄を賞美して武人の龜鑑とせり、たとへば酒に亂れて前後を忘じ、折から狼藉のもの亂入して拔合はさず、淺ましき最後を遂

げむまでも、せめては双の錆となりなむこと、なほ本懐ともいふべき所はあれ、よしさる事あるにもせよ、我下戸なれば酒に亂るゝ憂慮なきに、ものゝくしや三五人の曲者、寢込に蹈入るとも何でふ事のあるべき、欄に手は懸けでも眞髮引掴むで、二人三人は食殺しても見すべし、平生武道の嗜深く、義を見て命を惜まざること、二心の少年を捨つるよりなほ易し、あはれ事もあらば身の捨樣をいさぎようして、日本武人の模範ともなり、あれ見よ薩州の彈介と、誰にもあれ義死の折には、諸士この國に向つて三拜し、佛名代りに赤岩彈介運景と唱へさせなむ心懸は、食慾ゆゑに水泡と、消えぬは汚名末代の譏草、隼人の中に古今一人の腰拔の出來さむ事か、武運盡さぬる今夜の始末と、無念の涙も泣くとは女々し、かくあるべきにあらず、亭主に錢なきよしを語りて、申譯の切腹此場を去らじと覺悟極めしが、待て少時、勇士は疊の上の最後を耻づともいふなるに、いやしき蕎麥切店にて果てなむ事、これ重ねての笑はれ草なり、且は此店の迷惑本意にあらずと、長刀杖に深く思案の體を、亭主の外目には停滯とも見たらむかし、身近の物音に顏を上ぐれば、いつ來りしやら商人風の若者が、傍にて餘念なく打食ふ側に煙草苞を置きたり、中なる錢に目留り、我未だ武運盡きず、物かにかの錢を借りて勘定濟ませ、一先歸宅の上心遣なく腹切るべし。町人ゆるせ、不義の偷盜にはあらざるぞ、彈介慥に借用申すと、心中に謝辭いふて忍びやかに其錢を取出し、さり氣なく拂ひ濟ませて、立歸りけり。

捨つる命に獨身の氣安さ、誰に愛着の未練もなし、唯一人の伯父の近き邊に住める方への一通手早く認めける其文に曰く、

拙者今宵いかにも一分相立たざる事仕出來し申候に於ては、只今潔く切腹と覺悟仕候、夜中御太儀の段御察入候へども、淺からぬ緣類のよしみを以て、即刻御立合の義偏に奉願上候、委細は御面會の上にて萬々可申述候謹言。

人して持たせて最後の支度を急ぎ、伯父の來むまでを此世の名殘と、先祖代々の位牌に向ひて、此度不始末の段々を詫び、やがて一管の天吹を取出し、折しも月澄みわたる窓を開きて、心長閑に得意の一曲を奏づれば、空行く雲も遏まりて、庭には落葉の音しきりなり、思ひぞ出づる此一管は、淺水左右七が常住肌身に添へて秘愛の名笛たり、天下に可愛き物、一には彈介、二に此笛とまでに思入深く、秋も半過ぎに花野の夕暮、ゆかしの裙に草分の露は、情願かなはぬ焦れ人の涙、さるにても誰が文のはしだにゆるさ

ざりし袂は、戀風含みて靡くもあだ姿、男耶花踏分け〳〵吹鳴らし行くを、通懸りに其音の墓はしく、妻戀ふ鹿にはあらねど之に腸を斷ちて足の踏を覺えず、音に引されて見染めたりや御姿、假初に懸けし言葉に返しの言葉、縺れて解けやらざりし後々の物思ひは、其所に伏猪の床も厭はず、枕は此にとさしのべし腕に髮油の移香は、別れても消えねば忘られず重ねての訂情、戀の中立なればとて其より一入此笛を惜み、初契と銘して朱漆に我直筆を所望し、君見ぬ宵の形見と喜びけるに、十六歳の冬、馴初は露、別れ霜と消えて、面影はとゞまらずして戀は是に殘りぬ、今に三年其後は朝暮の友として、花月に吹慰みたるも是までなり、いでや此音の劔山血池の邊へも響きて、亡き人よ、我も逝くぞと知りたまへ、其ばかりに此世の吹納め、後に留めて何かせむ、戀の敵の舌に汚されむも口惜し、汝を大事に懸けし左右七も世を去り、我も今亦此世を去らむに、をのれ二代の情を思はゞ諸共に此處に擂けて、一片の煙となるを恨む事なかれ、我も是にてぞといふがまゝに、脇差拔放つて微塵に切割り、火鉢にさしくべ、我を彼世へ送火焚きて、合掌してありける所へ、伯父十郎右衛門血相變へて驅來り、門口より大聲立て、彈介切腹とや、驚き入りたり、仔細を申せと躍入る、彈介平伏の頭を得上げず、申すは面目なし、唯此儘に御介錯おのれ

何をいふぞ、面目なければこそ切腹すれ、一命捨つる期にいらざる遠慮立、仔細聞かずば立合はず、此まゝ歸るといふ、彈介額の汗を拭ひ、蕎麥切の一條を語るに、十郎右衛門足摺して口惜がり、情なき事、人にも語り難し、犬死なるぞと腹立聲の暴かなり、長らへば猫にも劣るべし、不覺は今にして悔ゆとも所爲なし、彈介亂心の上の自害とよろしく御披露なし下され、切腹の義御許容下さるべしと涙を流す、一文盜むも賊なれば、一國を盜むも賊なり、をのれ弓矢神にも見放されたる身の是非なし、死すとも此恥辱は雪ぎ難けむに、生きてなか〳〵人に對はすべき顏はあらじ、今は最後を急げと言放ちて、くわつと睨めたる眼中は、堪へかねたる涙はら〳〵と膝に玉走る假の、見る間に消ゆる命は惜や、せめては血の出る西瓜なりと斬つても死ぬべきに、筋骨もなき蕎麥を敵手に不承なりと無念の述懷、聞くに彈介いよ〳〵恥入りて、さし俯向きてゐたりしが、御免といふより早く、遺恨はなほ此中にぞと突立てたり、彈介盜みし錢は返さぬ氣か、机の上なる紙ひねりに七十二文、安い命と引廻して生害見事なり、千人にも見せたかりし死樣、十郎右衛門一生蕎麥切を斷ちて、盂蘭盆の精靈棚には干瓢を懸けしとや。

（一）居間の上

薔薇子（豪商の娘）
おはす（同家召使）

は　お嬢様、私は貴方にお怨を申さなければなりませんよ。

薔　おや、然う？

は　おや、然うぢやございませんよ。貴方のやうな酷い御方も無いもんでございます。

薔　おや、然う？　如何したの。

は　可うございますよ、多度那様に有仰いまし。何ぼ私のやうな者でも、恁だとか、那だとか、一言ぐらゐはお話をなすつて下すつたつてお宜いぢやございませんか。餘りぢやございませんか、私は悔うございますわ。

薔　何がさー

は　何がさぢやございませんよ、本當に、もうー

と蒟蒻に地震が揺つたやうに身を頭して憤れたがる。

薔　私には些も解らないよ。譯をお言ひな。

八重襅

は　言ふなと有仰つたつて、言はずに居られますものか。

薔　だから、お言ひな。

は　だから申しますとも。へえ、申しますとも、申す段ぢやございません。さあ、申しますよ。あれ、貴方は、もつと身を入れてお聽き遊ばしましな、丁と此方をお向きなすつて。

薔　ぢや、さあ恁うかい。

は　故とお膝なんぞへお手を支き遊ばさなくても宜うございますよ。人を馬鹿になさるもんぢやございません。

薔　だつて、手の置き所が無いもの。

は　ですから、もつと目に立たない所にお置き遊ばしましな。

薔　ぢや、簞笥の上？

は　存じません、私は。

薔　そんなら袂の中？　お薩でも入れるやうだね。

は　それがお薩なら私は左の方を頂戴致します。

薔　何故。左の方が太つて居るかね。

は　いゝえ。皮に黄金が附いて居りますもの。

薔　まあ、可厭だ。

は　常談どころぢやございません、私は申しますよ。と切口上に改つて、

は　お嬢様、私は今年廿二でございます。

薔　那樣事は知つて居るよ。

は　而して十三の秋から此方へ御奉公に上つたのでございます、然いたしますと、十三、十四、十五、十六、十七、十八……。

薔　十九、廿、廿一、廿二さ、知つて居るよ。

は　まあ、お聽き遊ばせよ。足掛十年の、まあ全九年と云ふもの貴方の御側に居るのでございます。奥樣の

御臨終の時にも、わざ〳〵お枕元へお召になつて、はすや、お前は能く神妙に勤めてくれた、此後とも私の亡い後は、猶氣を着けて嬢の世話をして上げてくれ。其の褒美には一切嫁入の支度はして遣るから、どうか落度の無いやうに長年して、此を親元にして嫁に適かうと思へ、而して生涯出入をしろよ、と誠に身に餘つた難有いお言。でございますから、私は是でも陰日向無く、もう〳〵一生懸命に御奉公致して居る意なのでございます。でございますからお嬢様も、他人とは思はない、と過日有仰つて下さいましたでございませう。お忘れ遊ばして？

薔　忘れはしない。

は　お忘れ遊ばしません？　他人とは思はない、他人と思はなければ、何とお思ひ遊ばすのでございます。

薔　解つて居るぢやないか。

は　然うでございませう。然う申しては失禮でございますけれど、身のやうに思ふ、と云ふ譯なんでございませう、究る所が。

薔　何だね、生意氣な、究る所がだなんて。

は　でも、まあ、然うでございませう。私のやうな者でも身と思つて下さいますんなら、何もお隱し遊ばさなくてもお宜いぢやございませんか。はい、私は御嫁入の支度も何も要りは致しません、那樣水臭い御主人から御嫁入の支度なんぞをして戴きたくはございませんのです、はい。蓮は恁う見えましても、慾や德で御奉公致して居るのではございませんから、はい。

薔薇子は一向上の空で、外の事を考へて居る樣子。

は　お嬢樣！　えゝ、もう貴方は私の申すことをお聽きなすつて下さらないんでございますか。

薔　懊惱いね、私はそれ所ぢやないのだよ。

は　はすは存じて居ります。丁と存じて居ります。それだから貴方は水臭い、と私はお怨み申すのでございますよ。幾許貴方が有仰つて下さいませんでも、はい、私は今朝ほど旦那樣から悉皆伺ひました。お嬢樣。此度はお目出度う存じます、然ぞお嬉くて在つしやいませう！

と膀を突出して憎たらしく言ふ。

薔　何がお目出度いのだよ、失禮な。嬉い事も何もありはしないわ。

は　嘘お吐き遊ばせ。餘りお嬉いんで蓮なんぞにお話をなさるのは惜くて在つしやるんでございませう。

薔　何が惜いものか、欲しけりや上げても可いよ。

は　貴方、本當に本當の事を有仰つて下さいましな。實は私は今朝ほど旦那様から、能く貴方の御了簡を聽いて見てくれ、と仰せ付つたんでございますから。旦那様の有仰いますには、今度貴方の御縁談があつて、先方は恁々だ。就いては貴方が如何思召して在つしやるか、恁云ふ談には女親が居なくては誠に都合が悪い、お前は不斷嬢の事を心配してくれるから、母親に成代つて嬢の胸を聽いて見てくれ、と何から何まで打明けてお話を遊ばして下すつたんでございます。それを肝心の貴方は是ばかりでもお話をなすつては下さらないんで、だから私は悔くて〳〵。

薔　私は嬉いと思ふ事なら、そりやお前に話をするのだけれど、嬉いとも何とも思はないから、別に話も爲なかつたのだわ。

は　これが貴方お嬉くなかつたら、女の一生に嬉い事があるもんでございますか。それぢや、貴方はお可厭なんでございますか。

薔　あゝ、可厭だよ。

は　ぢや、先方様がお氣に入らないんでございますか。

薔　考へて御覽な、氣にも何にも入りやうが無いぢやないか、見たことも無い人を。

は　でも、御婚禮あそばすと云ふ事はお嬉いのでございませう。

薔　些も嬉くはないわ。不見不識の他人の中へ入つて、艱しい機嫌を取つたり、つまらない氣兼苦勞をしなければ成らないのぢやないか。それよりは一生恁うして娘で居て、親の傍で我儘を言つて、氣樂に暮して居る方が、幾許可いか知れはしない。私は些もお嫁なんぞに適きたくはないのだよ。

は　私もお嫁の味は存じませんけれど、決して然云ふものぢやないさうでございますよ。其の證據には誰でも御婚禮を致すぢやございませんか。好いた人と一處になるのは。然ぞ樂みなことだらうと想ひますわ。そりや貴方、お嬢様、樂みでございますよ、好うございますよ、好いに違ございませんわ。私は好いと想ひます、そりや屹と好うございます。お嬢様、好うございますよ。

薔　だつて、好くにも好かないにも、未だ見たことも有りもしない人を私は可厭だわ。

は　そりや御尤でございますけれど、若し其の御方が申分の無い好いた方なら、お可厭なことはございますまい。

薔　それでも私は可厭だよ。

は　まあ!!

薔　それには譯が有るのだもの。那の犬川のお遊さんね、

は　はい〳〵。

薔　新田のお苗さんね、それから、横原の板子さん、此の三人はお前も知つて居る通り、兄弟同樣の中善で、甚麼事が有つても不相變一生御交際を爲やう、と終始然う言ひ暮して居たのだよ。だから、面々お嫁に歸く時も、衆へ相談をしたくらゐで、板子さんは醫學士の藏内さんへ歸く、お苗さんは物産會社の船積さん、お遊さんは陸軍中尉の鬼柴さんと、それ〴〵緣付いたのだけれど、それはお前、面々隨分選りに擇つて、此人ならばと自分に得心して、謂はゞ皆好いた處へ歸つたのだよ。然うして兄弟のやうにして居たお友達は一人殘らず緣付いて了ふのに、私獨り内に居るのは、然も〳〵意氣地の無いやうで、其の當座は全く好い心持はしなかつたよ。

は　それは貴方、誰だつて好い心持は致しませんとも、然うでございますとも。

薔　それで、衆が來ては各自にお婿さんの自慢を言つて、何したの、恁したのと睦しい話を爲るものだから、私も早くお嫁に歸きたい、と實は念つたことも、それは有るわ。

は　ございませうともね。それにお孃樣は負ける嫌で在つしやいますから。へえ〳〵、それから。

薔　然う爲ると、お前、お嫁に歸つたとなると、三人とも言合せたやうに、誰も内へ遊びに來ておくれではないのだよ。でも私の方はね、夙ての約束通り不相變御交際をする氣で、往々皆さんの處を訪ねて上げるのだけれど、何と無く先とは樣子が變つて、浸々話も出來ないやうなの。而して遊んで居る中も、始終用有りさうに出たり入つたりして、もう擾々して些も面白くないの。それに私がお客で行つて居ると、家の内へ氣兼をして居るやうな風が見えるので、此方も誠に居辛いわね。何もお前、お嫁に歸つたのは厄介になつて居るのぢやなし、偶に友達が遊びに行つたつて、那樣に氣兼をすることは無いぢやないか。それが猶且何だとね、友達なんぞが遊びに行くのは、舅姑の手前へ餘り好くないのだとね。而して私の家へも遊びに來た

いのだけれど、猶且那樣這樣で外へも思ふやうに出られないのださうだつてね。まあ、何と云ふ情無い事だらう！　私はそれだけでもお嫁になんぞ歸くことは可厭になつて了つたわ。

謂ふに謂れない那樣やうな苦勞をする所爲か、三人が三人とも皆面窶がしてね、其中でもお苗さんね、那麼に大々と太り切つて居た人が、それは痩せて、半分ばかりに成つて了つたの、わづか、お前、半年ほどの内に。

は　へえ。まあ、お傷いぢやございませんか。然う致しますと、此の歳晩には全で御體は消失つてお了ひなさるのでございますね。

薔　まさか、お前。それから私は如何なすつたのと訊ねたらね、それは苦勞も辛い思もするけれど、唯それだけなら這麼にも痩せることは無いのだけれど、其の譯は餘りお可羞くてお話が出來ないつて、なか〳〵お言ひでないの。

は　如何でせう、まあ、可厭な方！　彼の方は一體然云ふ方なんでございますよ。

薔　那樣ことをお言ひだけれど、是は一番辛いわね。何しろ那云ふ體格だから、好所なお鮓なんぞになると、

十四十五ぐらゐ譯無に上るのだもの。

は　あら、御す文字のお話なんでございますか。

薔　お鮨には限らないけれど、船積さんの處の食物は、それは悪いのだとね。而して其も思ふやうには食べられないのだとさ。那處はね、外と違つて、男の舅さんがお釜の下まで世話を燒いて、それこそ目の眩るほど口喧しくて、お茶を一杯飲むにも其の方に斷るのだと。然云ふ風だから御飯の時の殿い事と謂つたら、丁と見張つて居て、お苗さんの規定と謂ふのは、朝が二膳にお晝が三膳、お夜食が二膳と、其上は甚麼事にも食べられないのだと、女の體には過ぎる〳〵、と傍から言はれるので。唯まあお肚一杯に食べて居るのは船積さん一人ぐらゐのもので、他は始終足りない勝で居るから、内の恥を言ふのぢやないが、私始め家内の者の顏の色澤を御覽なさいつて、お苗さんがお言ひのだが、成程皆同じやうに變に黄色く萎びて居るの。是は全く〳〵お澤庵を多く食べる所爲だつて、お苗さんもお嫁に歸くのは辛いものだとは聞いて居たけれど、這麼にも餒いとは想はなかつたつて、熟く後悔してお在のやうなの。而して那の元氣の話好の、能く〳〵面白いことを言つた人が、誠に陰氣になつて、口數もお利きでないから、それも聞いたらばね、猶且食の

足りない所爲で、久しぶりでお目に掛つたからお話は山々あるのだけれど、何分にも息が切れて、それはお話をして出來ないことはないけれど、然うすると迚もお夜食までお肚が持たないから、失禮だけれど、是も朋友の誼と思つて、どうぞ容してくれとお言ひなの。

もう其を聞いて私は熟くお嫁になんぞ歸くものぢやないと念つたわ。外の苦勞なら未だ好いけれど、食物の事で苦勞するのは、吁、私は可厭可厭！

は　それは貴方、いくら舅御樣が鄙吝になすつたつて、御本尊のお婿樣がお苗樣をお見染なすつて、大相な御慰望で被入つたのでございますから、隆になり日向になつて、お苗樣の食べたいと有仰る物は十分に食べさして上げるに差違ございませんよ。それが貴方、人情でございますもの。

薔　其が然うでないのだから。那の船積さんが亦阿父さんに負けず劣らずの鄙吝で、其が爲に今紛紜が起つて居るのだとさ。實にお苗さんは因果なのね。彼處は阿母さんが違ふので、妬くのだと。

は　氣障だ、耐りませんね！　阿父さんには喉口を干され、阿母さんには妬れ、而して旦那樣が鄙吝で如何なすつたのでございます。

薔　本當に話にも何もなりはしない。恁うだとさ、家内が殖えると物が要るから、俺は子供は嫌だ、決して子供を拵へることは成らない、と然う言ふのだと。

は　何方がでございます。

薔　船積さんがさ。

は　えゝ、まあ！　いつそお苗樣はもう〳〵品胎でもお産み遊ばして遣ればお宜いのに。

薔　所がお前、出來たのだつて。

は　好い氣味だ！　品胎でございますか。

薔　まさか品胎ぢやないけれども、お腹の樣子では孕ぢやなからうかと云ふの。

は　御丁寧に、まあ。

薔　それだものだから、阿母さんは猶妬く、船積さんは機嫌を惡くする、惡阻でもつて物が食べられないので、喜ぶのは阿父さんばかり、お苗さんは大きなお腹を抱へて泣いてばつかりお在だとさ。

は　まあ、お可愛さうに。可厭でございますね。

薔　然して紛紜の起つて居るのはお苗さんの處ばかりぢやないのだよ。中善の三人が三人ながら、お嫁に歸つて好い事は無いのだもの。それから板子さんさ、那の人は藪内さんが好男子だものだから、大變な御自慢だつたけれど、男振が好いだけに浮氣でもつて、何でも下谷とか新橋とかの藝者に、疾から夫婦約束をした者が二人あつて、女義太夫を情婦とかに持つて居て、麻布邊の華族の御隱居の男妾をして、其上に博士とかの獨逸人のお嬢さんを瞞して居て、一體病家の奥さんやお嬢さんを引掛けるのがお得意なのだとね。だから板子さんは些の看板で、それに那云ふ氣の善い人だものだから、書生や婢にまで馬鹿にされて、實に行つて見て居るとお氣毒のやうだわ。

は　まあ、馬鹿々々しい。可厭でございますね。

薔　酷い目に遭つて居るのはお遊さんよ。那の人は武張つたことが所好で、牧島の大和心を人問はゞ旭に匂ふ山櫻花、といふ歌を直に言ふのが癖で、何でも軍人の處へ適くのだ、と不斷から然う言つてお在の望どほり、鬼柴さんへ片附いた時にも、旭に山櫻の裾模樣で御婚禮をしたくらゐのだけれど、御亭主は可恐い飲拔で、始終軍人仲間を大勢引張つて來てはお酒が始るので、月給は皆飲んで了つて、それで足りなくて、

お遊さんの持つてお在の着物は殘らず質とかに入れて、而してお酒の氣が無いと機嫌が惡くて、醉ふと亂暴をして、頭を打つのが癖なのだとさ。だものだから、お遊さんは近頃腦病が出て、何日と云ふ事は無しに快々として居るぢやないか。

は　まあ、氣の利かない。可厭でございますね。

薔　那樣思をしても、女は一旦片附いたからには、何處までも辛抱をしなければならないわね。それは緣を切つて切れないことは無いけれども、二度目となれば體に玷が付くのだから、女は本當に滿らないよ、それを考へたり、三人の身の上の事を思ふと、私はもうくお嫁なんぞには歸くまいと念つて、未だに恁うして居るのは、其麼に仕合なのだか知れはしないよ。

此間も板子さんから長い手紙を下すつてね、貴方ばかりは決してお嫁に歸かうとは爲さるなつて、惡々も意見をして來たくらゐだから、私は本當に考へて居るわね。

は　へゝ、若しお嬢樣がお嫁にお出あそばして、那樣事でもございましたら、私は如何致しませう、私はもうくく死んで了ひますでございます、其事を書置して。

蕾　私は又其の代筆は御免だよ。

は　書置を他に頼むなんて法はございませんから、其時は自筆で認めます。

蕾　然ぞ見事だらうね。

は　可うございますよ、お嬢様。

蕾　お前だつて那様話を聞けば可厭になるだらう。選りに擇つて、是ならば確と思つて歸つた先でさへ、三人のやうな事があるのだもの、まして今度の縁談と云ふのは、阿父様が獨で承知をして極めてお了ひなすつたのだもの、私は可厭だわ。生意氣な事を言ふのぢやないけれど、歸く當人に何の話も爲さらずに、幾許親だつて餘り酷いわ。私は全で知りもしないのに、那の人なら申分無いの、第一俺が惚れて了つたのと、那麼に有仰るくらゐなら、阿父様が御自分でお嫁に御出なさるが可いわね。

は　えゝ〳〵、本に然うでございますとも。いつそ然う申上げませうか。

蕾　あら、馬鹿なことをお言ひでないよ。

は　けれども、那の頑しい旦那様は何處かへお嫁に歸つてお了ひなすつて、譯の解つた若旦那様とお嬢様と

御夫婦にお成り遊ばして、毎日面白い事をして暢氣に暮しましたら、甚麼に好いでございませう。

蕾　氣樂なことを言つて居るよ。噫、如何かして此の縁談は斷つて了ひたいのだけれど、困るね、阿父様は那の御氣性だから、滅多な事を云ふと甚麼に證られるか知れないし、毎なら阿兄様に然う言へば、話對手になつておくれなのだけれど、今度の事は阿兄様も敵組になつてお在なのだから、蓮や、お前でも可いから味方にと思つたけれど、お前ぢや爲様が無いものねえ。

は　それは、お嬢様、誰に有仰つて在つしやるのでございます。

蕾　お前さ。

は　お前とは私のことでございますか。

蕾　當然さ。

は　當然なもんでございますか！　恁う見えても猫には勝でございますよ。

蕾　それぢや今晩試に奎所の戸棚の中に寢かさうよ。

は　にゝ、何とでも有仰いましとも。私はね、貴方がお一人で然ぞお困り遊ばして在つしやいませうと存じ

て、及ばずながらお力にもならう、と然う念つて居りましたのでございますけれど、（お前ぢや爲様が無いつ。）能くも那様ことを有仰いましたね。覚えて在つしやいましよ。貴方の味方にして戴かなくても、はい、蓮は些も困りは致しませんの。旦那様の方へお附き申しても、散々貴方を困らして上げますから、まあ其の意で在つしやいまし。

薔　知らないよ。私は私の考量があるから、可いからお前なんぞは彼地へ行つておくれ。

は　はい〳〵、私なんぞは彼地へ参ります。彼地へ参つて旦那様へ然う申上げませうでございます、お嬢様の御了簡を伺ひました所が、内の阿父さまのやうな譯の解らない人の見立てたお婿様なら、どうで私の氣に入る筈は無いのだから、それを切て歸けと言ふんなら、身を投げると言つて嚇す意だ。而して、御自分のお婿様なら手拵に爲るから他は頼まない。丁度今一人拵へ最中のが有る、と有仰つて威張つてお在でございますから、隨分御用心をあそばしまし、と何でも旦那様の御立腹あそばすやうな事を精々言告けて上げますから、然やうならば御機嫌よろしう。

薔　お待ちよ、お待ちつてば。

は　もう今ピィと鳴つて了ひました。此次は三時四十分。

薔　後生だから待つておくれ。待たないと凍瘡の處を捻るよ、

は　あゝ、待ちます。

と店突にべたりと坐つて、

は　はい、待ちましたが如何致しました。

薔　ほゝほゝ、お色の白いことね。

と食み出してゐるお蓮の膝頭をポンと拊く。

居間の下　召使　薔薇子　父　壽右衛門

は　貴方、此の膝とも談合でございますよ。

薔　それぢや何とかお前、智恵があるかい。

は　智恵と申して別に持合もございませんけれど、一體まあお嬢様の思召は何云ふんでございます。

先様が好いた御方なら御縁組を遊ばしますんでございませう。

薔　だつて、お前、好くにも好かないにも……。

は　いゝえ、貴方、もしも好いた御方ならば、と申すんでございますよ。

薔　もしも好いた方なら、それは又其時さ。

は　お宜いのでございませう？

薔　まあ可いとして置くわ。

は　猶且御婚禮は遊ばしたいんでございませう？

薔　那樣こと遊ばしたくはないわ。

は　でもお嬉いんでございませう？

薔　知らないよ、もう。

は　それでも然云ふ思召ならば、好い事がございます。那して旦那樣が有仰るのを、貴方が單だ可厭だでは濟みません、それは濟みません。でございますから、左も右も御本人の御樣子を見屆けた上に爲たい、と恁う有仰つて御覽あそばせな。

薔　然う言つて見て、可けなかつたら？

は　可けませんでしたら……。

薔　可けなかつたら？

は　些は貴方もお考へあそばせな、御自分の事ぢやございませんか。

薔　ぢや、可けなかつたら……。

は　可けませんでしたら？

薔　仍猶縁だからお前がお考へよ。

は　然うでございますか。然う致しますと……。

此時奥の方にて父壽右衛門の咳拂聞ゆる。

薔　大變だよ！　さあ、阿父さまが御出だから早く爲ておくれよ。

は　はい〳〵然う致しますと……。

薔　可けないね、早く〳〵〳〵！

は　はい〳〵〳〵。然う致しますと……。

薔　何時まで（然う致して）居るのだらう。もう可けない、可けない。

は　あゝ、後生ですから最少し!!　あゝ、何とか、何とか、何とか！

薔薇子は慌てゝ起ち行き、入口の紙門を啓かぬやうに押へて、

薔　さあ、恁うして居るから今の内に。

は　あゝ、成程、腟り押へて居て下さいましよ。えゝと、何とか、何とか、何とか。

とおはすは轉打ち廻つて智恵を搾る。折から居間の外には壽右衛門が紙門に手を掛けて、引けども引けども啓かねば、

壽　これ、薔薇子や。薔薇子は居ないのか。

手を放さぬやうに、とおはすは目顔で知らせる。薔薇子は早く考へぬか、と首で指圖をしつゝ、段々力弱りて紙門の開きかゝるを見るより、おはすも助勢と起ち行く隙に、壽右衛門は狹き口よりするりと入る。二人

は其とも知らず跡を押へて一生懸命の所を、

壽　何を爲るのじや！

薔　はい、あの……唯今……あの……一寸……あの……ねえ、蓮や。

は　然うでございますとも。

壽　何だ、何が一寸だか、何が然うなのだか全然解らんぢやないか。何爲呼ぶのに返事をせんのだ。

薔　幾度もはい〳〵と申したのですけれど、ねえ、蓮や。

は　然うでございますとも。此の紙門が除り堅いもんでございますから、ちよいと外へお聞え遊ばさないんでございます。

薔　ねえ、蓮や、ですから二人で啓けて上げたので。

は　ねえ、お嬢樣、然うでございますとも。

薔　ねえ、蓮や。

壽右衛門は片手に持てる書狀を一寸見遣りて、

壽　時に、はすや、嬢の了簡は如何じやな。恁うして今春山からの手紙で、四五日内には優男さんが用事を兼ねて此地へ出向いて來られるのだから、十日や二週間は内に逗留してござる都合になつたのじや。

は　へえ、あの、それではお婿樣が此方へ……。

と當惑の體にて薔薇子と顏を見合せる。

は　然やう致しますと、其晩に御婚禮を遊ばしますでございますか。

薔薇子は要らざる事を言ふなとの意にておはすの袖を引く。

壽　それでは何かの、嬢は早く婚禮がしたいと云ふのかの。

薔　いゝえ、決して那樣事はございません。

壽　ふむ。はすや、お前、嬢の了簡を聽いてくれたか、而して鹽梅は如何じやの。

は　はい〳〵。それに就きまして色々とお話が込入りまして、唯今御相談最中なんでございました、誠に好い智惠が出ませんもんで。

壽　何、好い智惠が出ない？　可笑なことを言ふのう。私は何もお前に嬢の相談對手になれと言付けはせ

んがな。

は　いゝえ、何でございます、お嬢さまが相談對手になつてくれと……。

薔　私だつて言付けはしないよ、お前でも相談對手になれば可いのだけれど、お前ぢや爲樣が無いと言つたばかりなのだわ。

は　貴方、お嬢さま、那樣事を有仰いますね。貴方が然云ふお心なら私も貴方の有仰つた事を皆申上げて了ひますから、あの、旦那さま、箇樣なんでございます。

おはすは喧嘩面になつて壽右衞門の方へ屹と向直る、其後から薔薇子はおはすの腋の下へ手を入れて力まかせに捻る。

は　あ、痛、た、た、た！

壽　如何した、え、これ、如何した！

薔　あら、はすや、お前如何おしだえ。

と然も狼狽へながら取附くやうに見せて、賴むから言つてくれるなと呟く。おはすは顰み面をして頷き

ながら腋の下を押へて哼と息を吐く。

壽　如何した、腹でも急に痛み出したかの。

は　いゝに、もう少し上の方なんで。

壽　はあ、胸が痛むのじやな。

は　もう少し横の方なんで。

薔薇子は又其の袖を引く。

壽　はあ、乳の邊？　乳は女の急所とある。

は　もう少し横なんでございます。

壽　はての、然うすると肋の三枚目邊じや。

は　まあ其の邊なんでございます。

壽　妙な所が痛んだものぢやないか。

は　まことに妙な所が急に痛みましたんで吃驚いたしました。

壽　然し、もう快いか。

は　はい、大分痛は薄ぎました。お嬢さま。

と如何にも力無げに呼ぶ。

薔　あいよ。

は　私は痛うございます。

薔　私は察してゐるよ、けれども病氣には勝てないから我慢をおしよ。

は　私は悔うございます。何ぼ病氣だつて餘り手前勝手と云つたら有りやしません。

薔　それはお前、病氣だつて屹度後悔をしてゐるよ。

壽　何を行らん事を言つて居る！

壽右衛門は更に語を改めて、

壽　さあ、四五日内には優男さんが來なさると云ふのじや、薔薇子お前の了簡は如何じやな。

は　はい、唯今お嬢さまの思召を伺ひましたでございますけれど、それは彼方から御出なんぞは御座いませ

ん意の思召なんでございますから、然やうな譯でございますと、又少々お嬢さまの思召もお變り遊ばしませうでございますから、もう一度新規蒔直しと致しまして、晩ほどに私から申上げますでございます、ねえ、お嬢さま。

壽　薔薇子は何を指を折つて勘定して居るのじや。あゝ、何か、四五日内と云ふので、うふ、ふ、ふ、ふ、おう、然うか。

と獨合點して喜笑をすれば、薔薇子は怪訝顔。

薔　いゝえ。

壽　いゝえじや？　それぢや何の勘定をしたのじや。

薔　これから晩まで何時間有るかと思ひまして。

壽　何の事じやい。然し、考量の、相談のと、暗々言ふのも今の内の事で、まあ、四五日經つて見なさい、一も二もありはせぬわい。何でも可いから、其の本人に逢つて見るのじや、のう。

は　旦那さまは然やう有仰いますけれど、是も所好々々でございますから、若もお嬢さまのお氣に召しませんでございましたら、……。

壽　ほゝう、嬢の氣に入らなかつたら？　私の一昨日の接木が枯れやうて、のう。

は　あの、旦那さまの御自慢の接木が！　如何いたして枯れますでございます。

壽　ほゝう、私の此の光つた頭顱に黑い毛が綠々と生へやうで、のう。

は　まあ〳〵〳〵！　然う致しますと、私の此の揉上も最少し出來やうでございませうか。

壽　揉上は偖置いて、米が一斗の蠶になるわの。子を思はぬ親は無い、可愛い娘に見立てた婿に卒が有つて成るものかな。此の親仁だとて生から這麼に禿げて居たのではない、小言は小言、粹は粹、私と掛けて日蓮さまの書判と解くのじや。

は　其の心は？

壽　難しいやうでも解つて居る。

薔　では阿父さま、私が一つ掛けませう。今度の綠談と掛けて、（タバ）と解きますの。

壽　鰡か。

薔　いゝえ、(タバ)。
壽　薪なんぞの束か。
薔　いゝえ、唯假名で(タバ)。
壽　唯(タバ)とは何の事じやな。
薔　それが謎なのですもの。
壽　はての、どうも解らん、お前に上げた。
薔　まあ、晩まで阿父さまに預けました。
壽　よし、預つた。お前方にも晩まで預けたぞ、
は　畏りました、
壽右衛門は出て行く。
は　お嬢さま、今の謎は何と解くんでございます。
薔　那かい。　と頬に笑ふ、

薔　(タバ)だから、ねえ、煙草のタバさ。其の心は、今度の縁談だから、
コ　(紛、子)は可厭だと云ふのさ。巧いだらう。
は　まあ、可恐い牽強ぢやございませんか。
折から三時の時計が鳴る。
薔　おや、もう三時だよ。
は　さあ〳〵〳〵。
と卒に襟を掻合せて居住を直す。

(二)　その晩

壽右衛門
婆子
主從

娘主從の入來れるも知らず、壽右衛門は一心不亂に考へ居る。
は　旦那さま、あの、旦那さま。
薔　もし、阿父さま。

それでも問付けぬので、二人一處に大く呼ぶ。

壽　おゝ、吃驚した。

薔　何を考へてお在なさるの。

壽　いや、あの、（タバ）と掛けられたのが、如何しても解けんのじや。

は　おや、然やうでございますか。あの（タバ）は解けませんでございますなら、いつそ切つて了はうと申す譯なので……。

壽　何！　何じやと。

は　で御座いますから、其に就きまして お孃さまから一件の御願がございますさうで。さあ貴方、有仰いましな。

壽　うむ、而して其の願と云ふのは？

は　何でも、其の御願が愜ひさへ致せば、お孃さまも旦那さまの仰せ通にお成り遊ばすんださうでございます。

壽　それは妙じやて。私が其の願を肯けば、薔薇子も私の言ふ事を肯く、可からう。

は　さあ、可からうと有仰いますよ。

薔　阿父さま、あの、今度の事でございますね、阿父さまが善いとお考へなすつてお極めなすつたのですから、決して氣に入らないの、何のと云ふ譯ではないのですけれど、未だ一遍もお目に掛つたことは無し、何云ふ御氣風の方だか解らないのでは、私氣が濟みませんから、今度お出を幸に、何云ふ御樣子の方だか、又甚麼御氣風だか、其が能く知りたいのでございます。

壽　それは譯の無い事じや。半月も逗留してござるのじやから、二人して能く視るが可いのう。

薔　然うですけれど、唯表面から見たばかりで解るものではありませんから、本當の處が見たいのでございます。

壽　それは何處でも見たい處を見るが可いのう。

薔　御樣子だけなら直に知れますけれど、私はお肚の中まで見たいのでございます。

壽　それも見るが可いのう。

薔　ですけれども、一寸は見えません。

壽　見えまい！　おゝ、是は見えまいとも。

薔　それが見たいので。

壽　それは見たからうとも。

薔　それを見るには如何も尋常では見られません。

壽　然うとも。目で見るものなら、目鏡もある、顕微鏡もある、其外又色々と器械なども有らうけれど、人の腹中を見やうと云ふには眼力だ。

は　へえゝ、ガンリキと云ふ那樣、まあ、器械がございますんで御座いますか。

壽　恍けたことを言ふぢやない。眼力と云ふのは眼の力よ。

は　へえゝ、眼には力がございますんで。

壽　おはすは頻に目を白黑ざして力を入れて見る。

薔　私なぞには迚も其の眼力は有りませんから。

は　然うでございますとも。力を入れるほど見えは致しません。

薔　然うでなしに見たいと思ひまして……。

壽　そりや見たからうが、外に見やうも無いからのう。

薔　有るのでございます。

壽　有るえ？　是は聽きものじや。眼力でなしに腹の中を見る、手放て鼻涕を去むより艱しからう。

薔　それが些も艱しくはないのですから。

壽　器用な事じやのう。うむ、如何する。

は　旦那さま、そこがお嬢さまの御願なんでございます。

壽　大方然うぢやらうよ。

薔　いづれ京都から入つしやると、宅にお泊りなすつてお在なのですね。

壽　一寸來るのは唯だ客で、泊つて居るから泊客かの。

薔　何方にしてもお客に來てお在なれば、御遠慮を爲さいませう。

壽　餘り遠慮を爲れるのも困るがのう。

薔　又始めてお目に掛るのですから、私の前では取繕つてお在だらうと思ひます。

壽　そりや若い同士の事じやから、又取繕ふも可いさ。客に來て居ながら遠慮の羽目を外して、内のやうに我儘をしたり、始めて會ふ人の娘を藝者か何ではあるまいし、突如に蝶けたりする奴が有つて耐るものか。

は　其處々々、其處でございますよ。

薔　さあ、其の我儘をしたり、常談も言つたり爲る心易立の中に、其人の生地は見えるのですわ。

櫛　大きに、のう。

薔　それですから、私は可成く其の謹慎の無い處が見たいと思ひまして。

壽　これ〳〵、何を言ふ！　未だ祝言もせん内から、我儘を爲たり、蝶け散したり、那樣事を親たる者が許さうと思ふのか。馬鹿も大概にしなさい！

は　あれ、まあ旦那さま、未だ先が有るんでございますよ。

壽　先が有るのは知つて居る。

薔　それならば皆お聽きなすつて、而して謹るならお謹りなさいましな。

壽　先は先として、今迄の分を一寸謹つて置いたのじや。

は　旦那さま、是からが本當に聞物なんでございます。私はもうお嬢樣のお智慧には驚いて了ひまして御座います。本當に怖いやうなお智慧が出るんでございますもの。

壽　おゝ、然うかの。それは何と謂つても女子中學校を卒業して、漢文は讀む、英語は出來る。國學の大和詞が行く、數學、習字、歷史に地理の、和歌、作文、裁縫に料理、又は女禮式の……。

と圖に乘つて指を折る。

は　お手紙、新聞、小說本、お琴にお茶の湯、編物がお上手で、お髮が結へて、西洋料理が召上れて、御兄弟中が善く〳〵て、お氣前が大く〳〵て、……。

と同じやうに指を折る。

壽　まだ齋も一寸書いた。

は　まだ齋も一寸お書き遊ばして、あゝ、未だ御座いますとも、海水浴で游泳を遊ばす。それから、歌骨牌が御名人で、目敏くて在しつて、あゝ、最一つ有ると丁度十五になるんでございますけれども。

薔　はすや、一寸此の處を槌いておくれな、私は肩が凝つて了つたよ。

壽　さあ、其の先が聞きたいのう。

薔　それで、謹慎の無い處を見るには、迚も面と向つて居ては可けませんから、私といふ者は何處までも陰になつて居て、而して篤りと御樣子を見屆けたいと思ひまして。

壽　宛で怪物を退治るやうな始末じやのう。然し、先方も故々來るのじやから、肝心のお前が陰になつて居られては、さつぱり趣意が立たん。又私もそれでは先方へ對して相濟まん。第一大事の花婿を、事も有らうに、怪物扱ひに爲ると云ふのが心得違じや。

は　あれ、旦那さま、未だ先が有るんでございますのに。

壽　よく先が有るのう、田舍道を聞くやうに。

は　旦那さまは又汽車でお出なさいますやうに、行過ぎてばかり在つしやるんでございますもの。

壽　おゝ、それぢや停車場で下りて聞くか。そこで……。

薔　はすと私と入替りましてね、はすを私の擬にして、私が蓮の姿になつて居りましたら、奉公人の前で、は多少か御遠慮もなさるまいでせうから、包み隱さない生地の處も解らうと思ひます。そこを私が蓮に成つて居て見たいのでございます。

は　私は又私でもつて端然とお孃さまに成濟して居りまして、お婿樣の異に氣取つて、お品の良いことばかり言つて在つしやる處を見て置いて、一一お孃さまにお話を致します。お孃さまはお孃さまで御自分にお見屆け遊ばした所と、私の申上げる所とを照合せて御覽になりますから、それ、鐵札か、金札か。それとも贋札か。馬鹿か、利根か、大丈夫か、薄鈍か。正直か、狡猾か。浮氣者か、賢人か。刻薄か、實意者か。

壽　聒しい！

は　はい。

壽　然うすると、何じやな、お前と蓮とが互に姿を易へて、お前が蓮になつてお前の召使、蓮がお前になつてお前の……。

薔　何だか紛糾つて解らなくなつて了ひました。

壽　何有、能く解つて居る。恁うじや、お前が蓮になつて、蓮の召使、のう。蓮がお前になつて、蓮の主人か。

薔　然うですか知らん。

壽　然うですか知らんつて、自分が言出して置きながら。

薔　はすや、おまい、今のが解つたかい。

は　解りませんけれども、本來解り切つて居るぢやございませんか。貴方が私にお成りあそばして、私が貴方にお成りあそばす。

壽　然うよ。私の言ふのも然うじや。先づお前が嬢になるのぢやらう。

は　然やうでございます。

壽　而して嬢の主人になるのぢやらう。

は　いゝえ。

壽　何いゝえな事があるものか。

は　いゝえで御座いますとも。お嬢さまに御主人はございませんです。私がお嬢さまに成りますれば、猶且はすの主人でございます。

壽　えゝ、解らん奴じや。其の蓮は嬢、嬢は主人ではないか。

は　で御座いますから、嬢は主人——あれ御免遊ばしまし——お嬢さまは御主人、其の御主人に主人はございません。

壽　知れた事じや。ぢやから私が言ふのじや。ま、能く聽けよ、落付いて。お前が嬢に成らうと云ふのぢやらう。

は　而してお嬢さまが私にお成り遊ばすんで御座います。

壽　ま、默つて聽きな。お前が嬢に成つて……。

は　もう解つて居りますで御座います。

壽　ま、、默つて聽きな。お前が嬢に成つて、嬢がお前に成ると爲れば、お前が嬢の主人に成つて、……。

は　それ〳〵〳〵！

とおはすが耐りかねて悍り出せば、壽右衛門も差理無理、

壽　ま、、默つて聽きなと言ふに。

は　いゝえ、此で默つて居りましては大變でございます。私はお嬢さまに成りますんで、お嬢さまの御主人なんぞに成るんぢやございません。

壽　知れた事じやー　主人といふのは嬢の事、

は　召使と申すのは私の事。

壽　嬢といふのは薔薇子の事、

は　私と申すのは蓮の事でございます。

薔　何だね、お前は默つてお在よ。

壽　然うとも、默つて居るが可い。

薔　阿父さまも（お前が嬢に成つて、嬢がお前になる）と其迄にしてお措きなされば可いのに、色々後をお附けなさるものだから、つい解らなく成つて了ふのですよ。

壽　解からなく成る事があるものか。まあ、一寸聽きな。のう、お前が嬢になつて……。

薔　私は始から嬢ですわ。

は　えへん。　と大な咳拂を爲る。

壽　おゝ、然うじや。お前は嬢、那の難理會的が蓮じや。

は　えへんつ。

薔　えゝ、彼は難理會的の爲樣が無しですから、言つても無駄です。私には能く解つて居ますから、彼に言聞せるのはお止なすつて、是非然云ふ事にして先の方の御樣子が見たいのですが、私も阿父さまの言ふ事を聽きますから、阿父さまも此の御願を聽いて下さいましな。

壽　それぢや何か、其の願を聽けば、私の言にも背かんと云ふのじやな。で、若も優雄さんがお前の氣に入

らんかつたら如何する。

蕾　然したら阿父さまの其の光つた頭に黒い毛が繁々と生へるさうではございませんか。

壽　うゝ。　と塞る。おはすは雀躍をして、

は　えへん〳〵。げつ〳〵げえい。

蕾　あれ、お前如何したのだね。

は　唯今溜飲が下るんでございます。貴方も一寸お下げ遊ばせよ。よう、げえいと有仰いよう。

此間壽右衛門は考へ居たりしが、

壽　然し、然うは謂ふものゝ、是も人々の所好々々でのう、

は　おや〳〵〳〵、接木が枯れさうでございますよ。

壽右衛門は首を低れて益々考込む。

おはすは吃々笑ひながら小聲にて、

は　一寸、お嬢さま、那の滑々したお頭に斷然黒いお髪が生るんださうで御座いますから、其時は是非

お手拍子御喝采を願ひます。

蕾　何だね、那樣事を—

壽　はて、考へものじやて。那が恁で、是が恁と、因で此方が恁なれば、彼方が那か。那して恁して、恁なれば那として、那の恁の、恁の那か。はて、な。どうも是は私の一存にも極めかねる、いづれ延太郎とる後に相談の上挨拶を爲るとせう。もう彼も歸つて來さうなものじやが、のう。

（三）　内談　父　壽右衛門　息　延太郎

壽右衛門京都よりの件の書狀を下に置きて、それと睨め競の思案投首、餘程持扱ひたる體。延太郎入來る。

延　唯今歸りました。

壽　おゝ、延太郎か、待つて居たのじや。早速談が有るのじやが、まあ之から見てくれ。

と展げたる書面のまゝ推遣る。

延　へえ、京都から。何ぞ事が出來ましたか。

と取上げて口の中にて讀む。

延　やあ、面白い。お茶番を一幕ださうと云ふのですな。是は御趣向だ。

壽　何を言つて居るのじや、能く目を開いて視るが可い。何處に茶番をすると書いてある。眞面目で然う言つて來て居るのではないか。

延　先方が之を眞面目だからお茶番だと謂ふのでさ。然し是は可いぢやありませんか。本人同士ではお互に取繕つて居て、本當の處が知れないから、附いて來る書生と入替りの、花作簍作で入り込まうと謂ふんですな。

壽　何の事たか、お前の言ふことは誠に解らんのう。

延　それぢや平假名入ルビ付で言へば……。

壽　何じやと。

延　通俗に言へば、書生を自分に仕立て、自分が書生の姿になつて、薔薇子の樣子を見やうと謂ふんで。其

の魂膽を此方が知らずでは、間違なんぞが有つてはならないと謂ふんで、阿父さんから恁うして耳打をして寄越した譯なんですな。貴方は、それ、優雄さんと謂ふのを識つてお在だから可いけれど、此の手紙でも無かつた日には、私なんぞの狼狽方は有りませんな。

壽　本人には決して言つてくれるなとしてあるのう。

延　それは知れておまさ。之を薔薇子が心得て居た日には、龍宮の紛失物で玉無しです。

壽　そりや成程他は然うぢやらうが、其を知らせずに措くと云ふのも如何か、のう。

延　いゝえ、放つて置くが可うございます。而して此方だつて目が有るんですから、蒟蒻か比日魚か、箸を着けるまでもありません。其が又主と家來と見分の付かないやうな代物なら、對手に爲るがものは無い、放棄して了ふんですな。

壽　それぢや、まあ言はん事にしても、此に又一つ面倒な事が起つたのじやて。今の通り他からも然う言つてくれば、薔薇子の方からも丁度同じ事を言出しての、ま、不思議も不思議よ。

延　ほう、薔薇子も同じ事を？　ふう、それぢや猶且身替一件を？

壽　然うよ。

延　へえ。ぢや、此方は蓮が換玉ですな。

壽　然うよ。

延　そりや面白い！　遣るべしですな。

壽　何云ふものかのう、お前は然う前後の考量も無く、左右飛返りたがつて。他の相談を受けたら、少しは考へてから挨拶をするものじや。何でも變つた事と云ふと、首から乘氣になつて噪ぐ、惡い癖じや。然云ふのを、お祭了簡と言つて、迚も大な仕事を爲得る器量ではないわ。吁、可慨しい事じや。と苦り切つて横を向く。

延　相談なら相談、意見なら意見と、何方かに極めて下さいな、其なら然うで此方にも聞き樣が有るんですから。大體意見をなさるやうな無能なら……始から相談をなさらないが可し、又相談をなさる位可頼い者なら何も意見をなさるには當らないと謂つて見たやうなものです。

壽　其の不減口が第一惡い。

延　どうせ相談が格に無くて、意見に振替られるやうな野郎ですもの、そこら中皆惡いんでせう。當年二十五歳にも相成つて未だ嫁さへ貰へない意氣地無しの悴でございます。

壽　誰が嫁を貰つて遣らんと言つた。薔薇子を先に片附けて了はんければ、何の彼のと面倒じやから早く談を纏めやうと思やこそ、恁うして心配を爲りや、相談も爲るのじやがな。

延　其の相談も爲る迄は至極解つて居ますが、後が打壞でした。

壽　これよ、談が談じやに打壞などといふ詞は嫌ふが可い。

延　嫌ふが可いなんぞは、獨且辻占が惡うございます。

壽　いや、それで憶出したが、實は嫌ふが可いじやて。若し書生が化けて居るのとも知らず、其が氣に入られては大事じやと思つて、他の魂膽を薔薇子に知らして置かずば成るまいかとも考へるのじやが、然うかと云つて、此方は此方で同じやうな風似をして居て見ると、他が其を知らずでは、其際間違が出來やうも知れずの、さあ、して見れば、薔薇子に然云ふ事は成らんと止めたものか、如何したものぢやらう、のう。

延　他も然うして仕組んで來るのだから、此方も仕組せるが可いぢやありませんか。然して阿父さんと私と

が嚴正中立といふ奴を守つて口を拭いて居れば、他は自分ばかり仕組んだ氣で居る、此方は又此方ばかりの意か何かで、總て暗闘捜合の所見、こいつは屹度面白い！

壽　それが悪いと言うのじや。何も面白盡の話ぢやない、

延　ま、ま、まあお聽きなさい。意見は意見、相談は相談。それで、双方から十分に見合ふ。善し、こゝらが水の入れ處と見たら、私達が中に入つて、悉皆狂言の筋を聽せて、纏るものなら纏める……。

壽　纏らんものなら？

延　纏めないだけの話。

壽　それぢや何にも成らんがな。

延　そこが縁でさ。

壽　いや、險難な縁じや。ま、ま那樣事は萬々一にも有るまいが、何しろ、此方は其の書生を本人と思込んで居るのじやて、それで可いとなつたら其時は如何したものぢやらう。

延　と來たら私にお委せなさい。ねえ、阿父さん火事の手傳でせう、西洋料理の宴會又は田舍客の案内ですかね、別して女の子に關する一切の紛擾と來たら、阿父さんなんぞの躊躇と出る幕ぢやありません。心得たものです、此の延太郎が心得て居ます。御安心なさい、湯屋の煙です。

壽　おゝ、それぢや萬々一にも那樣間違が有つたら、お前が屹度引承けるの？　大丈夫かの、可いかの。

延　大丈夫！　宜しい！　憚りながら御安心なさい。

壽　どうか知らんて、從來お前には度々引承けられて、懲りて居るから、のう。

延　いゝえ、然う〳〵爲挫らうと謂つたつて爲挫れるものでもありませんから、今度あたりは如何にか成りますよ、彼の天運と云ふ奴は專ら循環するんですからな。

壽　それなら何もお前に頼むことは無い。

延　そこを頼むのが依樣親子の情で、是非も無い處なのでせう。

壽　全く是非も無いのじや。お前のやうな者に頼みたくはないけれど……。

延　難有う存じます。もう外に御用は御座いませんか。

壽　未だ有るのは、左も右も蓮を嬢に仕立てゝあるで、若も甚麽か拍子で彼が他の氣に入らんとも限るまい？

延　御安心なさい。阿古屋ではないが雪と墨です。兄の慾目で言ふちやありませんが、先づ其處へ出した所で骨格から違ひます。暗黑で撫で〻見たつて判る話で、撫でるのが面倒なら一寸嗅いだつて、片方は何と無く汗臭い。又其の見分の付かないやうな唐邊僕なら、彼を與れて遣るのは致な事で、出來で幾許もお間に合ふのが有りますから、外樣を當つて見るが可うございまさ。

壽　然うぢやらうともの。私も然うは思ふけれど。

延　そりや、貴方、薔薇子の女振と云ふものは、今度の上野の展覽會に出て居る雨乞小町の横顔に肖て居るくらゐのもんです。

壽　ほう、小町の繪に、のう。そりや善かつた！

延　それから未だ肖て居るんです。

壽　未だ肖て居るかの。

延　今度は私なんです。

壽　お前がな？

延　私のはづッと天の岩戸です。

壽　それは何よりじや、のう。ふむ、ふむ。

延　彼處は大勢神樣が控へて居ませう、それ、何とかの尊だなんて。那の上から五枚目に在つしやる四十恰格の尊に一寸肖て居るので。

壽　はあ、勿體ない！　と目を瞑つて恭しく頭を下げる。

延　それから未だ阿父さんも肖てお在なんです。

壽　いや、私もな？

延　阿父さんのは又づッと格が變つて、前面が日の出です。

壽　日の出とは難有い。

延　其に霞が棚引いて居て、一面の涙です。

壽　日の出に涙！　目出度い、のう。それから。

延　涙の眞中に恁う巖が押立つて、それに金銀の苔が附いて。

壽　金銀の苔が附いて居るか。

延　それに大中小と簑龜が三匹。

壽　はあ、見事なものじや、のう。

延　其の中の龜の子の眞向の顏色が、何處とも謂へず、それは肖て居るんですがね。

壽　何？　私の肖て居るのは龜の子じやと。

延　銀の簑龜に肖てお在なんですから、お目出度いぢやありませんか。人が人に肖て居るのは、珍しくも何ともありはしません。年寄が簑龜に肖て居ると來た日には、家中へ祝儀をお出しなすつても可い位のものです。

壽　それも然うか、のう。目出度い次手に今度の話も圓く納めたいものじやが、如何か双方とも巧く目利をしてくれゝば可いが、のう。

延　お案じなさるほどの事は有りませんよ。優雄さんと云ふ方は未だお目にも懸らず、甚麼人物だか知りませんから、薔薇子の氣に入るか、如何だか、そこ處は、何ぼ引承ける私でも保證は出來ませんけれど、薔薇子の方は氣遣無しです、彼が男の目に着かなかつたら、右の謝罪として金五千圓進呈と廣告しても可うございます。だから、此方には些も苦勞は有りませんけれど、先方が如何かと思つて、それが多少か案じられるんでさ。

壽　先方が如何かとは、薔薇子の氣に入らんやうな事が有りはせんかと謂ふのかな。

延　そこです。

壽　恍けたことを！　學問が有つて、才氣が有つて、可いかの、樣子は好し、男振は好し、それで愛嬌が有つて辯が爽かで、のう。

延　それぢや始から（申分が無い）と言つて了つた方が手取早いくらゐのもんで。

壽　其通り、申分が無いのじやから、彼が薔薇子の氣に入らんやうなら、二人にも言つた事じやが、私の此の禿げた頭に黑い髮が生へやうと……。

延　廣告をなさいますかな。然云ふ譯なら、些も案じる事は無いぢやありませんか。ねえ、阿父さんは先方の申分が無い處をお引承けなさる、又私は私で、薔薇子が小町に肖て居るのを引承けるんですから、此の双

方の引承を分體すれば、手付かずに兩善しの相惚となる。因でシャン〳〵シャンのお目出度うございの譯無しでさ。

壽　何を言ふのやら、お前の話は獨合點で、誠に解り難い、のう。

延　ねえ、阿父さんは先方を保證なさるんでせう。薔薇子の方は私が保證するんでせう。恁うして兩方に歷とした身元引承人が付いて居るんですから、是は御安心なさいまし。

壽　成程理窟さの。

延　ですから、構ふ事はありませんから、其の狂言を遣らせるが可うございまさ。緣が有れば、一寸刺した柳の枝にも根が付くし、無い緣ならば、九々二十七度の盃をしたつて纏る事はありはしません。

壽　ぢや、ま、默つて見て居やうか、のう。

延　それに限ります。

壽　あゝ、然し氣遣でならん。

延　お年は取りたくないものです。

（四）　珍客の上

春山の書生
實は春山優雄

春山優雄黑木綿三つ紋の羽織に小倉の袴を穿き、總て書生の扮裝にて大鞄を携へながら出で來る。

優　どうか巧く行けば可いが、古里が那の調子では怪いものだ。而して、那奴の憎いことは、二度と這麼事は無いと謂ふ氣で、いや、三日天下の暴威を振ふが、那が耐らん！　傍に人でも居ると惡く主人風を吹せて、叱り飛す、逐使ふ、我ながら目も當てられん始末だ。途上の稽古中でさへ那の位手暴いのだから、いよいよ福富の内へ來たとなつたら、其の氣焰實に當るべからざる者あらんだらうよ。まあ然し、それは可いとして措くのだ、始から恁云ふ苦肉の計を行ふのだから、多少の艱難は覺悟の前だけれど、唯氣遣はれるのは、中途で馬脚を露しはせんかと云ふ一事だ。彼も一寸推出した處では、顏色だつて太く拙くもなし、體格は別して善し、半分は服裝で威して了ふから、まあ〳〵春山優雄で通らん事は無いのだけれど、野卑な事を言ふのと、目先の見えないのと、而して那の大食には誤る。此方が始終軍師として附いて居れば、又何か恁か傍からお茶を濁しも爲るけれど、手放たら大變物だらう。

夫に、奴はまあ何爲那も卑く出來て居るのだらう。一昨日家を出るから今日までに那の百本入のマニラの箱を大方喫して了つて、眩暈がして胸が悪くて克はんと云つて騒いで居るのだが、聞いて見ると、今月は葉巻の豐年だから喫置を爲るのだとは如何だらう。

いや、化の皮が露れると云へば、福富の老人は俺の顔を知つて居るのだから、是には夙て通じてあるのだから、懇々も頼んで置いたから、よもや旗[illegible]話しは爲まいてな。那の老人又大の娘自慢で、過日も切に、唯一遍會つて下さい、而して思召に稱はなかつたら、強ひてとは願はんのだからなどゝ、心中頗る得意に見えたから、此際却て門戸を開いて、其の天眞を見せるのを喜ぶかも知れん。那で何しろ一風ある人物だから、父も其點は懸念無いと言つたが、さて其の自慢の令嬢は甚麽ものか知らん。二度吃驚は御免だて。

時に三日天下の我君は如何したのだらう。一寸京橋に委托物があるから放込んで來ると云つたが、察するに、又金時計を拈弄ながら何處かで法螺を吹いて居ると見えるな。那麽時計を無上に拈弄られては、歸る迄には好加減に壞れて了ふだらう。時計も壞れるが、俺の體も其通り、奴の手に掛つては無事には居まいよ。

いや、恁うして何時まで往來に待つて居られるものでもない、一つ先觸に乘込むとしやう。門口に來る。

ほゝう、立派々々、聞きしに勝る居宅だ。頼まう、頼まう。おや、御返事無しは怪しからんな。今日恁うして珍客の來るのは知れて居るのに、どうも冷遇千萬な、本來なれば停車場まで迎を出して然るべきである、然う手數を掛けまいと、此方は故と差控へて時間の通知も爲んのだつた。今日は一體誰が來るのだと思つて居るのだらう。噫、這麽不心得な家風の家と緣を結ぶのは可汚しい！　ねゝ、もう還る〳〵。いや、これは失禮、大きに失禮を。此に電鈴が在つた。餘り洒落て小いものだから目に着かなかつた。そこで之を押すか、うん、鳴る〳〵〳〵。

珍客の下

書生實は春山優雄
召使實は薔薇子
壽石衛門
延太郎

薔薇子召使の姿にて取次に出づ。

薔　はい、何方樣で在つしやいます。

春　にゝ、私は京都の春山優雄の書生でございます。主人は一寸寄道を致しましたので、私だけ先へ出ましてございます。どうぞお奥へ然やう有仰つて下さい。

薔　おや、然やうでございますか。まあ、どうぞお上り遊ばして。

春　それでは御免を。

と内に入る。此時双方始めて顔を合する。

薔　暫く是でお待ち下さいまし。

と男の方を見返り〳〵奥へ入る。優雄は又其跡を熟と見送りて、

春　好いな！　那は好い。那でも好いくらゐのものだ。既に召使で那だから、本人たる者は想ふべしだぞ。必ず那より優るとも劣ることは無い。如何となればだ、女といふものは嫉妬の強いもの、それが己より器量の好い召使を置くなどゝ謂ふ事は断じて無い。主となると、殊に家來との別を立てたがるものだ、どうも其が人情で爲方が無い。左も右も那より好いことは、事實として察するに餘ありと謂つて可からう。那より好いとして見ると、さあ、甚麽に好いのかな。

と目を塞いで暫く考へる。

春　迚も考へられん、想像の及ぶ所でない。唯（那より好い）と云ふので滿足して置くのだな。然し本人たる者は那より何程好いか知らんけれど、那の好いのにも驚嘆の外は無い。いくら好いと云つたつて那は召使、召使で居ながら氣韻の高いことは、立派に令嬢、否姫君の器だ。那より本人は優つて居ると爲れば、令嬢で居ながら氣韻の高いことは？　何の器だらう。人倫ではもう姫君の上は無いから、勢ひ神事になつて來る、天女の器かな。天女の器で、尻が輕くて妄に飛んで行かれたら、是も耐らない！　然し、天女の器だ。春山優雄たるものは天女を妻と爲る……われ三保の松原に上り、浦の景色を眺むる所に、虚空に花降り、音樂聞え、靈香西方に薫ず、これ唯事と思はぬ所に、これなる美しき松に衣掛れり、と段々調子付いて大聲に謠ひ出す。

春　寄りて見れば色香妙にして常の衣にあらず、いかさま取りて還り、古き人にも見せ、家の寶となさばやと存じさふらふ……。

奥より出で來る壽右衛門、延太郎、後より薔薇子。

壽　いや、本物ですな。

と後から聲を懸ける。優雄は度を失ひて、

春　これは甚だ失禮を。先づ始まして お目に懸りまする。

と推付けるやうに初對面の挨拶をする。

壽　どうぞ最少しお聞せ下さい。結構なお嗜で。

春　先づ始まして、私は古里遠と申しまして。

壽　外の藝事は宜くないが、那の謠といふものは、誠に上品な、紳士の嗜んで居て然るべき……。

春　春山の書生でございます。にゝ。……。

壽　御流義は何で、えゝ御流義は？

春　えゝ、此度は……。

壽　はあ、金春？

春　いえ、此度と申したので。

壽　へえ、このたび流？

延太郎見かねて其へ出る。

延　それは〳〵、御遠方を然ぞお疲でしたらう。彼方で御寛お休みなさいまし。蓮や、おまへ御案内を。

壽　さあ、貴方彼方へ。

延　お荷物をお前お持ちよ。

（はい）と言つて起ちはしたものゝ、此のお荷物たるや、既に優雄も途上弱らせられしほどの目方なれば、蓮薇子の力にては持擧げたるばかりにて動も取れず、それでも如何にか爲る氣で散々に腕きゐる。延太郎は此體を見て可笑さを怀へゐたりしが、ふと顔を合せると舌を出す。此間に優雄は壽右衛門に向ひて、十分に底意を含めさせんと云ふ心にて、

春　お初にお目に懸りますが、私は古里遠と申しまして、長年春山樣に御厄介になつて居りまする、甚だ不調法者でございます。

と宜く目顔にて知する。

壽　はい〳〵、御書面でありましたから委細承知して居ます。それで、自然彼此取込みまするで、一向お構ひ申されません。其代りお宅にお在も同様に、どうぞ、まあ、お氣儘にな。誠に私方は此のお客扱が不器用で外様では痒い處へ手が達くが、私方では痛い處へ足が觸るとでも謂ひたいので、別して今度御出のやうなお客筋は一向不馴でな、

春　至極御尤で。

壽　定めて不行屆ばかりぢやらうと思ひます。

春　どう致しまして、お客などゝは以ての外で、唯箇様な不調法な書生と、そこを御承知下さいますれば、……。

壽　そこは承知。はい、承知して居ます。

延　さあ、どうぞ彼方へ。蓮や、何をして居るのだな。早く其のお荷物を持つて行かないのか。

壽　まあ、お前そんなに言ふな。蓮、如何した。

薔　はい、私の力では……なか〳〵……あの……。

壽　重くて持てんか。そりや然う……あゝ、然うか、然うして措さな、今に延太郎にでも持せて遣るから。

薔　若旦那さま、まことに憚りさまでございます。

延　それは貴方、奉公人に甘いと云ふもんです。何處の國に婢が手ぶらで若旦那が荷物を挈げるなんと云ふ圖が在るもんですか。

壽　在つても無くても、女の事で持てんと云ふのなら爲方が無い。持ちなさい、持ちなさい。

延　本當に重いんなら持ちますけれど、何爲、奉公人根性で骨惜をするんでさ。

薔　あら、那様事を有仰るなら持つて御覽なさいましよ。

延　其の手を吃ふものか。一寸見たつて輕さうな物だ。

薔　あら、輕くはありませんよ。

延　輕いよ。

壽　どれ〳〵私が試てやらう。

と自身に行つて鞄を挙げる。延太郎は之を好い幸にして、

延　まあ、古里さん、彼方へ被入い。

これにて優雄は心着き、壽右衛門の荷を持てるを見て、

春　是は恐縮！

と直に行きて鞄を取らうとする。

壽　いや、是は悴に。これよ、延太郎。

春　いえ、どうぞ、もう。私が、どうぞ〳〵、是は私が。

壽　これよ、延太郎。

春　どうぞ、もう。どうぞ〳〵。

（五）客間　書生實は優雄　召使實は薔薇子

優雄を上座に、薔薇子茶の給仕をして居る。

春　此方のお嬢さまのお名前は薔薇子さまと有仰いましたな。

薔　然やうでございます。

春　貴方は何と有仰る。

薔　私のやうな者は……。

春　だつて、お名前は有りませう。

薔　何ぼ下女風情でも名前ぐらゐは、あの御座います。

春　いや、是は大きに失禮を。

薔　貴方は古里様と有仰いますので？

春　如何にも古里、名前は遠と申します。何分此度は御厄介に成ります。

薔　私はゝすと申しまして、まことに不束な田舎者でございますが、何分どうぞ宜うお願ひ申します。

春　失敬ながら田舎者は虚でせう。

薔　いゝえ、本當に田舎産なのでございます。

春　田舎は日本橋在ですか。

薔　いゝえ、目黒の先でございます。あの、貴方は春山様には餘程久しく〜お出でございますか。

春　餘程久しく居りますな。

薔　何年ほど？

春　えゝ、もう、ずつと。幼少の頃から。

薔　では、若旦那さまの御氣質は能く御存じで在つしやいませうね。

春　えゝ、存じて居りますとも。誰にも隱して心の底の下積にして居られる事まで了と知つて居る位のものです。

薔　一寸云ふと、何云ふ御方で在つしやるのでございます。

春　一寸云ふと良い方ですな。貴方はお幾歳です。

薔　私は十九でございますが、若旦那さまは如何良い御方なのでございます。

春　總て良いのですな。貴方は御惚領ですか。

薔　然やうではございませんが、總て良いと有仰つて、何云ふ御氣質で在つしやいますのです。

春　然やうな、婦人には極優しい方で。而すると貴方は何れへかお片附きなさるのですな——然うですか。貴方のやうな方を細君に持つものは仕合ですな。

薔　那麼事を有仰います。あの、若旦那さまは婦人には優しいと有仰いますと、殿方にはお優しくないのでございますか。

春　やはり優しいので、一度お會ひなされば大概樣子で解ります。もう今に御出でせうから、惚れちや可けませんよ。

薔　私よりはどうぞお嬢さまがお惚れ遊ばすやうに致したうございます。

春　大きに御尤。お嬢さまは然ぞ何とか有仰つてお在でしたらうな。

薔　はい、何云ふ御方か知らんと、それは毎日苦にしてばかり在つしやいました。

春　大きに御尤。私などは深い事は知りませんが、此方の御老人の有仰る處では、お嬢さまの方には少しも御異存が無いので、私主人の方さへ承知なれば直に話は纏る、と云ふやうに聞いて居りましたが、全〜お嬢

さまの方には始から御異存はお有なさらんのですか。何云ふものでせう。

薔　依様御異存はお有なさるのでございます。

春　御異存が有る？　いや、それは大分話が違ふ。貴方さへ御承諾下されば、此方には少しも異存は無い、と那ほど迄に言れるから、此方は其を眞に承けて、……。

と我を忘れて艶然となりしが、遽に心着き、

春　いや、是は大きに御尤。而してお嬢さまは何と言つて被在います。

薔　阿父さまは獨合點をして、世界に二人と無いやうにそれは褒めちぎつてお在ですけれど、男の心持と女の心持とは別でもあるし、年寄の目と若い者の目とは違ふから、幾許阿父さまが好くても、本人の私には又甚麽に好くないかも知れない。それを御自分一人の了簡で極めて了つて、是に爲ろと突付けるやうに爲さるけれど、過日も三井の陳列場へ入しつて、餘り好かつたから、お前に買つて來たが、如何だと言つて帶を取つて下すつたのは可かつたが、全でお酌が結めるやうな物を、何爲る事も出來ずに居るのが好いお手本で、阿父さまのお見立には懲々したから、今度のお話も心配でならない、と那様に有仰つてございました。

春　大きに御尤。前に然云ふ事が有つたので、今度は品物を取寄せて見ると云ふのですな。然うして見ると、私主人なるものは反物で、其に附いて來る私は鬱金木綿の風呂敷ですか。大きに難有うございます。

薔　あれ、決して那様つもりで申したのでは御座いますさん。貴方が若も鬱金木綿の風呂敷ならば……あの、私は頭巾に致しますわ。

春　それは難有い。若も貴方が私を頭巾にして下されば、内にお在の時でも私は被り付いて居て取れはしませんから。いや、然し京都から此まで取寄せられて、見散かされて、どうも氣に入らないからと謂ふので突返されるやうな事無さにしもあらず、と知つて居られたら、故々お出になるぢやなかつたらうに、是は大きに不見識であつた。

と熟と考込む。其の顏を薔薇子は又熟と眺めて、見れば見るほど好い殿振と、懲風なるものが身に浸遍る驕梅。優雄は屹と頷いて起上り、

春　是は奥へ行つて一談判せにやならん。始のお話とは全で違ふ。屹と嚴談の上即刻此を引拂ひます。

薔　まあ、貴方……。

春　お放しなさい。

薔　お待ち下さいまし。

と縋付いて離れぬのを、優雄は心中大きに嬉しく、内々薔薇子の姿を限無く眴し居る。

薔　それでは私が御主人に相濟みませんから、どうぞ今のは此限のお話になすつて下さいまし。然もございません。と私は活きては居られません。

春　いゝや、お放しなさい。

薔　それぢや私は活きて居られませんから死んで了ひます。

春　はあ、お死になさい。貴方が是から死ぬよりは私が行つて談判する方が早い。貴方の死に切れない内に此方は談判を濟して了ひますよ。

薔　死ぬのに那樣に手間は懸りませんから、然やうなれば貴方。

と手を放して駈行く。今度は優雄が慌てゝ、後から抱留める。

春　お待ちなさい。

薔　いゝえ、お放し下さいまし。

春　待ちませんね。待たんければ宜しい。此の兵兒帶で貴方を縛つて置いて、而して私は奥へ行きますから。

と忙しく袴の紐を解く。

薔　あれ、可けません、那樣事は。

又形勢一變して、今放せと爭ひし薔薇子が縋り付けば、

春　お放しなさい。

薔　いゝえ、放しません。

二人は手を取り、取られながら、思はず顏を合せしまゝに、暫く熟と見取れる。

春　まあ、此へお坐りなさいな。

薔薇子はゝつと心着き、四邊を眴しながら、

薔　貴方、此をお放し下さいまし。

春　放しません。放すと貴方の命に關ります。

と引寄せて薔薇子の顔を見れば、面を背けて切に可羞がる。然りとも知らで入來るは、換玉婿の古里遠。

吉　怪しからん、是は怪しからん！

忽ち飛退く二人を睨付けて、

古　古里！

春　はい。

古　女中！

薔　はい。

古　いや、お前たちは怪しからんもんだぞ。

と例の金時計を手繰り出して、一寸時刻を見て、

古　何時だと思ふんだ。もう十分で四時ぢやないか。既に四時だと云ふに怪しからん。

春　唯今お着でございましたか。大分お手間が取れましたな。此方さまでもお待兼で。お女中さん、早速お奥へお知せ下さいまし。

薔　是は入つしやいまし。然やうならお奥へ申上げて參ります。

と薔薇子は座敷を出ると、紙門を細目に放けて、婿に化けたる古里の樣子を窺ひ、好かぬ奴といふ氣色にて、

憤れたがりながら奥へ行く。

古、先生、

春　叱！

古　今のは醜態ですな。

春　然うでない。色仕掛にして後から探らうと云ふ計なのだ。

古　いや、然云ふ計を用ゐて宜しいなら、やはり私は古里遠の方が可うございました。

春　だから、令嬢の方はお前が宜しいやうに計を用ゐるが可いさ。

古　用ゐて可うございますか。私も色仕掛なる者を用ゐますよ。

春　あゝ、宜しい。

古　而して萬一令嬢が靡きましたら如何ですか。

春　潔く（いさぎよ）お前に譲る。

古　潔く？　譲る？　此の財産は凡そ若干（いくら）でせうか。

春　まづ六七萬かな。

古　よいしよ！

春　氣障なことを言ふなよ。

古　先生既に令孃を御覽になつたのですか。

春　いや、未だ。おゝ、足音がする。可いか、疑（しつか）り頼むよ。えへん。

古　えへん。

（六）庭内

實は古里遠
實は薔薇子（おはす）
實は優雄

二人連立（つれだ）ちて散歩しながら、

古　令孃那（あ）の木の茂つて居る後（うしろ）に家の在るのは何ですか。

は　あれは茶室（ちやしつ）でございます。

古　はあ、茶室と云ふと、茶を立てゝ飲む狹苦（せまくるし）い處ですな。其は幸ひ、那へ行つて休まうぢやありませんか。

は　あの、私は近頃手を傷（いた）めまして、お茶を立てることが出來ませんから。

古　何有（なあに）、茶などは立てんでも宜しい。

は　それでは參りませう。

茶室の障子を啓（あ）けて兩人腰を掛くる。

古　これは密談を爲（す）るには最も妙だ。令孃には色々お話したい事が有るのです、もう少し此方（こつち）へ寄りたまへ。

は　椿（つばき）が好く咲きましたこと。

古　椿も咲いたが、令孃の指環（ゆびわ）も澤山に見事なものですな。

は　這麽（こんな）に穿（は）めて居りますもので、どうも肩が凝つてなりません。

古　成程。僕も這麽（こんな）金時計を持つて居るが、お目に懸けるやうな品ではない。先（さつき）から好い匂がすると思つた

ち、令孃のハンカチィフですか、之僕に與れたまへ、難有い。と引手繰つて袂へ丸め込む。

は　貴方はお人が悪いから用心するわ。

と指環を皆拔取つて紙入の中に仕舞ひ、櫛簪は紙に卷きて帶の間に挿む。

古　是は嚴い！

は　何方が嚴いか知れやしません。

古　時に此で一寸一盃遣りたいものだが、何か肴を命じて下さい。

は　料理屋ではございませんから、然云ふ譯には參りません。

古　何爲、行かんことが有るものか。荷くも船富壽右衛門氏の富を以てして、其の愛娘の婿たるべき春山優雄を饗するに於てをやだ。麥酒に西洋料理が可い。それも上等でないと皿數が少いから、上等を命じる。麵包牛酪や水菓子は要らんから、其分を何か一皿加けるやうに、而して麥酒は二本。

は　御酒は晩になすつて、唯今は一寸あつさりお菓子でも、ね、然うなさいまし。好いお茶を淹れさせませう。お菓子なら私も戴きますから。

古　此際僕は酒の方が可いのだけれど、令孃が恁う爲いと言ふのなら、それは菓子でも茶でも、湯でも水でも……。

は　那麼巧いことを仰有つて、私が申さないでも隨分喫るぢやございませんか。今朝の召上つたのには家中吃驚して居りましたよ。

古　それが、僕は元來堅苦くして居るのが大嫌であるのに、此の家は惡く眞面目で氣が塞つて耐らんから、物を食ふ時少し樂を爲るのです。然し僕は大食には違無い、如何にも大食であるが、薔薇子さん……。と異な目をしてお蓮の手を執る。

古　それが男子たる者の疵にはならんでせう。吾人が大食をすると、腹の中に乞食が居候でもして居るやうに言ふけれどもが、決して那樣ものが居るのでもなければ、又所謂虫の所爲でもない、畢竟は胃が強いからで、言換れば體が壯健なのだ。體が壯健でなければ長生が出來ん、長生が出來んければ、夫婦になつても其の樂みを續けることが出來ん。なあ、令孃、然うでせう。こゝが最も考ふべき所ですよ。恁う見た所、令孃も頗る壯健だ。

は　あれ、可哀さうに私は大食ぢやございません。

古　いや、大食でなくも、それは壯健な者は有る。令孃の此の壯健に。

とおはすの肩を丁と拊ち、

古　堪へる夫は寡くとも倍壯健の體を持たんければならん。であるからして、僕は令孃を見ると大に感ずる所あるやうな譯で、一層食慾を皷舞してからに、今後とも壯健に壯健を加へんとするのであります、譬へば僕の書生のあの古里遼……。

は　本當に樣子の好い方ね。

古　それだから可かん！　那奴は物を食ふのも僕の四分の一ぐらゐ、であるからして、一寸見ると姿は好いやうだが、それだけ體が弱い。一年　中藥といふものを絶したことが無い、飯の代に藥を飲んで居るのだ。幾多姿が好くても肝心の體が弱かつたら、貴方、如何しますか。

は　然うでございますね。私も這麼に太つて居るのが氣になつて、可厭で可厭でならないんでございますけれど、それぢや女も丈夫向の方が依樣宜しいんでございますかね。

古　勿論です。夫婦たる以上は何方が弱くても可かん、双方が壯健だけ其だけ快樂が多いのですからな。

は　でも、貴方、適には一寸疾ふのも好いもんぢやございませんか。餘り丈夫なのは可憎うございます。それに、年中働き詰の休無しと云ふ體では、時々は疾つて寢るのも保養でございますわ。それが、私どもは可厭に丈夫で、滅多に風も引かないんですから、病身の者よりは一割方損かと思ひます。

古　はっはっはっ、年中働き詰の休無し！　はっはっはっ。疾つて寢るのも保養！　はっはっはっ。信じません、僕は信じません！　否、信じられんのだ。年中働き詰の休無しと云ふのは、それは奉公人の體だ。疾つて寢るのも保養などゝは、所謂奉公人根性だ。六七萬の財産家と聞ゆる福富家の令孃たる貴方が、はっはっはっ、箸より重い物は持たれんと云ふことは能く知つて居るです。然し、然う言つては僕の氣に入るまいと云ふ考量で、内では下女同樣に働いて居る、と大に平民的に養成されて居るかのやうに言はれたのであらうけれどもが、はっはっはっ、猶且令孃は令孃だ、那樣事を言はれても他は信じはせんですよ。然し、其の無邪氣な處が有難いので、よいしよ！

は　あゝ、吃驚した。

と突如に奇聲を出す。

古　時に令嬢、吭が渇いて、腹が減つて來たのですがね。

は　はい、唯今申付けます。

おはすはカラコロ〳〵〳〵と其處まで出て、母屋の方に向つて手を鳴し、

は　あの、蓮や、一寸來ておくれな。

薔　はい〳〵唯今。

と薔薇子は急いて用を聞さに來る。

は　あの、お茶とお菓子を持つてお出で。お菓子は何か貰つたのが有るだらう。

と言ふ傍かう薔薇子に睨まれて、

は　けれど、貰つたのなんぞは可けないから、新規に取つて來るのだよ。

薔　畏りました。

古　早くしてくれ、可いか。

と横柄に言ふ。薔薇子は其顏を一寸見て、

薔　はい、畏りましてございます。

と返して行くと與に傍路より忍び寄りたる春山優雄、雜栽の蔭に潛みて樣子を立聽く。

古　令嬢、僕は一日貴方を伴れて何處かへ行つて見たいと思ふですけれどもが、如何ですか。

は　阿父さまに聞いて見ませんければ、出られますか、如何ですか。

古　阿父さまなどは如何でもなるのですが、貴方は如何ですか。

は　私は結構でございますけれど、那樣事をなさいますと後で後悔をなさらなければなりませんから……。

古　何爲後で後悔をせんければならんです。ねえ、是れ一つ伺ひたい。

と言ふのを機に擦付いて、又おはすの手を握る。

は　貴方、今の婢は如何でございます。

古　如何とは？

は　お目に留りませんか。

古　何故ですか。

は　好い器量でございませう。

此時薔薇子は茶と菓子とを持來りて、是も小陰に立聽をする。

古　好いか、惡いか、僕は下女を見に來たんではないですね。それぢや何ですか、僕には下女が相當だと言ふんですか。僕は然う見えますか。

は　あれ、那樣意で申したのではございませんけれど、彼を皆さんがお譽めなさるから、貴方のお目にも留りましたかと思ひまして。

古　留りません、更に留りません！

は　口頭では那樣に有仰つても……。

古　心ぢや何とか僕が思つとると云ふですか。

は　まあ、そこいらで御座いませう。

古　ふむ。それぢや口頭ばかりでない證據を僕が見せませうか。

は　どうぞ。

古　來たら僕が蹴飛ばすが如何です。

おはすも有繋に肝を潰して、

は　貴方がお嬢……御常談を有仰いまし。

古　いや、常談でない！　貴方の爲なら下女の一匹や二匹は蹴殺して見せる。

と力味返つて待構へる。薔薇子は腹が立つやら、悔しいやら、吾を忘れて茶盆を取落す。此の物音に二人は吃驚してぱつと離れる。優雄は衝と起上つて考へ込む。

（七）念の爲の上

壽右衛門實はおはす

は　旦那さま、未だお目覺でございましたか。

壽　おゝ、蓮か。此の夜深に何用じや。

は　貴間は人目が御座いましたり、又お客樣が些でもお傍をお離しなさいませんものですから、這麼時分に上りましてございますが、旦那さま、まあ、到底もない事になつて了ひました。

壽　ほう、一條が露顯したか。それぢやから私が言はん事ぢやない、……。

は　あれ、違ひますでございます。

壽　違ふと？　では露顯したぢやない？　はゝあ、お前の事ぢやから又粗相をしたの。私の大事の那の銀の湯沸でも凹ましたか。

は　粗相には違ございませんけれど、お客樣の御粗相なんでございます。

壽　はあ、それでは依然湯沸を凹ましたのぢやの。

は　いゝえ、湯沸よりはもつとお大事の〳〵品が凹んだので御座います。

壽　何が凹んだ！

は　あの、お嬢さまがお凹みあそばしましたので。

壽　何、何、何！　嬢が凹んだと？　お客さまの粗相で嬢が凹んだと言ふか。如何凹んだ、甚麽顯梅に凹んだのじや。

は　それを申上に參りましたんでございますけれど、私の口からは何となく申上げ難いんでございます。

壽　お前が言難けりや嬢を此へ呼んで私が見て遣る。

は　お嬢さまは全で御存じないんで御座いますから。

壽　芋の煮えたも御存じ無いと云ふのは聞いたが、いくら馬鹿でも、自分の何處か凹んだのを知らんで居る奴が有るものか。

は　それぢや何も彼も申上げて了ひます。實は、あの、お客樣でございますね、どうも變なのでございますよ。

壽　ほう、變か。

は　私を何處までも此方のお嬢さまと思召して被在るんでございます。

壽　それが變なものか。

は　此の後が變なのでございます。で御座いますもんですから、私に色々な事を有仰るんで御座いますよ。

壽　未だそこらは變なのぢやなからうの。

は　もう漸次變でも宜うございますので。其の色々なことを有仰る中には、那だの恁だのと御親切に有仰る

もんですから、私は例も御挨拶に困つて了ふんで御座います。私の考へますには、此分でもう二三日も經ちますと、嘘から出た誠で、甚麽拍子で本物に成るまいもんでも御座いませんから、明日から此の狂言は幕になすつた方がお爲だらうと存じますでございます。

壽　そりや何と言ふ、あの、お客様がお前に彼此有仰る？　ほう、然うか、そりや可かつた！

は　何と有仰います。

壽　うゝ、成程、そりや言ふかも知れんて。

は　言ふかも知れんでは御座いませんよ、なか〳〵手殿く有仰るんで御座いますから、今日迄は何か恁か柳に風で受流して沙いで參りましたけれど、もう然う〳〵は私も續きませんでございますから、唯今限り此のお役目は御免を蒙ります。

壽　それは然うでもあらうが、のう、何も泰公と諦めて、最少しの辛防じや。是が主人の身替に立つと云ふにしても、お前の首を斬つて出すぢやなし、のう、毎日旨い物を食べて、好い着物を着て、可いか、樂をして、甚麽に願つたとて二度と有る事ぢやなし、おまへも忠義を思つて身替に立つたからには、傍へも寄

せられんほど嫌はれたとて、まあ是非も無いのぢやらう、のう。それが善う思はれるのは、冥理に協つたと云ふものじや。又お前にしても、那云ふ身分の方に彼此言はれるのは、決して悪い心持は爲んぢやらう。あ、如何じやな。

は　で御座います、私だつて悪い心持は致しませんですから、此のお役目は務まらないと申しますんで御座います。

壽　はて、のう。

は　然やうぢや御座いませんですか。私だつて女でございます、而して年頃でございます、いづれ嫁にも參らなければ成りません體で御座います。同じ嫁に參るならば少しでも宜しい所へ參りたいのが情合で御座います。

壽　一々無理も無いて、のう。

は　そこへ持つて參つて、那云ふ御方が何とか有仰つて下さいませば、私だつて嬉しう御座います。

壽　おゝ、尤。

は　私のやうな者でも御深切に有仰つて下さるかと思ひますと、適には妙な氣にもなりますで御座います。噫、爰で恁云ふ御挨拶さへしたら、話は直に纏るものをと思ひながら、然うでない、是は御主人樣の預り物だ、と熱と怀へます其の辛さ！　貧乏人が大金を預つて大晦日でも越すやうな、あの、心持が致すんで御座います。それでも今迄は左にか右にか辛抱致しましたけれど、もう私は出來ません、はい、迚も出來ません で御座いますから、粗相の御座いません内にお大事のお品はお返し申しますで御座います。這麼に迄申上げまして、猶且お聽入が御座いませんければ、私は前以てお斷り申して置きますが、那の貧の盜を致しますでございますよ。

壽　如何に何でも那樣事は困る。

は　ではお役目は御免を蒙ります。

壽　それは猶困るがな。

は　旦那さまよりは私の方が困ります。

壽　いや、然うでないと云ふに。

は　いゝゑ、もう何と有仰つても可けませんで御座います。

と持來たる風呂敷を解けば、中にはおのれの衣類を入れたり。手早く令嬢扮裝の帶を解きて、小袖を脫捨て、長襦袢一つになりて其の帶を疊み始める。

壽　これ、躁るな！　待てよ〳〵。

は　もう身替も恁うなれば、自害をしたも同然で御座います。

壽　ま、ま、何も着物を脫がんでも話は付くわな。

は　いゝゑ、私は脫いでから付けますで御座います。

壽　付けてから脫げと言ふに。

念の爲の下　壽右衛門　實は延太郎

延太郎慌忙しく入り來る。

延　はす、何だ、お前の其の態？　何しに帶を解いたのだ、何しに長襦袢一つになつたのだよ。阿父さん、

貴方も貴方ぢやありませんか、馬鹿も好い加減になすつてお措さなさい。當年二十五歳にもなる歴とした悴が有るのですよ、貴方には。而も其の悴には未だ嫁も無いのですよ。

壽　これよ、譯も聞かずに無法な事を言ひ居る、馬鹿な奴め！

延　馬鹿な奴ですと？　えゝ、然うでせう、馬鹿な親が生んだのですから。

壽　これ、馬鹿な親とは誰の事じや。

延　赫したつて可けませんよ。はす、此へ出ろ。

壽　はすに抵ることは無い、私が對手じや。

延太郎は父親を尻目に挂けて、

延　御尤でございます。へっへっへっ。

壽　これ、其のへっへっへっが氣に入らん。

延　何だ、はす、逃げるのか。待て〳〵。

と利腕取つて引据ゑる。

壽　手暴なことを爲るな。

延　御尤でございます。さあ、はす、旦那さまがお前に何とか有仰つたのだらう。何と有仰つたか、其を言ひな。

は　いゝに、私から申上げたんで御座います。

延　何、お前の方から言出したのだ？　うむ、能く有る奴、一箸食ふと喝と血反吐を嘔くのだ。

は　あの、何と有仰います。

延　旦那さまを丸めて好い事を爲やうと云ふのだらう。

は　いえ、如何いたしまして、丸めるの何のと、那樣意ぢやないんで御座います。

延　馬鹿を云ふな。お前の年頃で這麼年寄に惚れたの、腫れたのと言ふ寸方が有るものか。

壽　馬鹿を言ふな、這麼年寄が若い婦女を捉へて、惚れたの、腫れたのと、那樣呪けた事が常談にも出來ると想ふか。

は　あれ、若旦那さま、私は……何ぼ何でも餘り情無い事を……可うございますよ。全で想ひも着かな

い事を……私は何ぼ何でも悔うございます。

と岸破と俯して泣入ると見れば、又顔を擧げて、

は　えゝ、悔しい、えゝ、えゝ。

と長襦袢の袖を咬裂かんとすれど、一向裂けざれば、愈よ憤れこみの啣へて振廻すばかりなり。

壽　那樣ものを裂いては可かん。

は　私は餘り悔うございます。

壽　おゝ、悔しいのは解つて居るから、裂くな〳〵。

は　若旦那さま、何ぼ何でも貴方は餘りな事を有仰います。私は腐つても蓮で御座います。御主人樣へ那樣眞似を致すやうな汚れた根性ぢやないんで御座います。私は是でも嫁入前の體で御座います、那樣無實の罪を被せられましては、大事な體に疵が付きますで御座います。貴方も餘りな事を有仰います。大概推測にも知れたもんで御座います。何ぼ私のやうなお多福でも、那麼お爺……。

延　おつと、それから？

おはすは行衆りて爲方無く、

は　私は悔うございます。

とばかりにわつと泣俯す。

壽　これよ、泣くな〳〵。お前に限つて、那樣者でない事は此の私が善う知つて居る。延太郎には今私が譯を話して、お前の顔の立つやうにして遣るから、のう、それで勘辨をしなさい。もう、泣くな〳〵。これ。

延太郎、此へ出ろ。

延　是は風が變つたかな。

壽　見なさい、はすは那の通り泣いて居る。

延　泣いて居ます。

壽　何で泣いて居ると思ふのじや。

延　悔しい〳〵と頻に斷つて居ますから、其に相違無いのでせう。

壽　悔しいのは當然じや。年の行かん女の身になつたら、泣くほど悔しいのは無理は無い、私のやうな年

寄でも隨分悔しいわい！

延　それほど悔しいなら御遠慮無くお泣きなさるが宜しい、が、まあ、其の悔しい譯から有仰い。這麽夜更小更に唯二人の、一人は男、年は取つても男は男でせう。

壽　知れた事じや。

延　一人は女……。

は　それが如何いたしました。

延　それが忠臣藏の討入に行燈と枕を持つて駈出すやうな不體裁な形をして居たち、對手は親であらうが、子であらうが、何爲用捨は無い、直に風俗壞亂と認めて差押へます。又、貴方は主人、はすは奉公人、其の奉公人たる者が主人の前で假にも帶を解くなどゝ那樣不作法な奴が今日有りますですか。それを又指を啣へて蕩然と見て居る主人が有りますですか。

壽　其處ぢやて……。

延　其處です。

壽　七度搜して人を疑へじや。お前は毎も其ぢやから、それでは如何もならんと、私は日頃から言ふのじや。

はすが帶を解いた、長襦袢一枚になつた、唯それ丈で、お前は私を疑ふのかな。

延　それ丈？　丈とは何です。

は　日那さまでは迚も若旦那さまの御口には克ひませんですから、私がお對手になりますで御座います。

壽　おゝ、然うか。年を取ると此の息が切れて、のう。

は　さあ、若旦那さま、丈で御座いますか。

壽　誠に勢が好い、のう。

は　さあ、若旦那さま、私の帶と此の長襦袢をお疑りなさいますなら、此の包、私の不斷着の此の包、是は何で御座います。何の爲に私が此の包を持つて參つたと思召すんで御座います。

延　那樣事まで思召して居られるものか。えゝ、穢らしい！　那方へ持つて行け、幾錢貸すものか。

は　可うございます、誰も借りやうとは申しませんです。

延　お互樣に貸さうとは言はない。然し、稼人の御亭主が長々の疾病で御難澁の處へ小兒のはあるし、そ

れに此頃の諸色高と來てゐるから、お前さんもお大抵ぢやなからうとも。あゝ、お察し申すよ。

は　多度那樣事をお有仰いまし！

壽　那と云へば恁と言ふ、我が子ながら幾と憎い口じや。はすや、最一度私に委せな。さあ、延太郎。

延　お早う御座います。

壽　何を言ふ？　さあ、此の包が何よりの證據じや。中に在るのは蓮の不斷着、のう、帶を解いて、長襦袢一枚になつて居るのは、之に着更へて了ふと言ふのを、私が折角止めて居たのじや。親の心子知らずめが、少し變つた事でもあると、直に飛返つて騒ぎ立てる。其の、の、後前見ずの、鼻元思案の、無分別の、輕躁の、お祭了簡が悪い疾じやと、日頃から私の言はん事ぢやないわ。

延　聞かん事ぢやありません。然し、然う言つちや何ですが、阿父さんにも悪い疾と云ふのが有りますですよ。

壽　又那樣事を！

延　無いとお言ひなら申します。何か私へお話と云ふと、屹度後が引拔で意見の早替は嚴しい事です。意

見は意見、話は話、分疏は分疏、詫は詫と、箱を別にして置くやうな事に願ひたいもので。唯今の處は何も意見をされる幕ぢやなからうと思ひます。それは成程七度搜して疑はなかつたのは、私の麁忽かも知れませんが、未だ麁忽か、馬骨か、牛骨か、其邊の見分も付かないのぢやありませんか。果して私の麁忽と云ふ證據が上つたら、そこで意見でも折檻でも何でも爲さるが宜しい、今の所は事實か麁忽か、證據裁判の豫審中、黑闇闇の碁石ぢやないが、白いか黑いか判らないのでさ。嫌疑の有る中は罪人です、神妙になさい。

壽　おのれ、親を捉へて罪人とは！

延　盜人を捉へて見れば我が子と謂ふ事も有ります。さあ、事實無根の證明から伺ひませう。

壽　おゝ、聞かして遣るから神妙にしろ。

延　親を調べるとなると勝手が違ふよ。

是にて壽右衛門、おはすは互相に事の原委を話す。疑團釋然として延太郎一言も無く面皮を缺く。

は　さあ、若旦那さま、如何で御座います。

壽　延太郎、如何じやな。

延　はあ、然う有つてこそ阿父さま！　それで延太郎も安心しました。

壽　何の事じや。

延　當節は滅法人氣が悪くなつて、なか〳〵以て顔が禿げて居るの、硬い物は咬めないのと謂つたつて、那様事で油斷も隙も有つたものぢやありません、懐爐も入れずに懐合の煖い年寄と云ふと、皆達者に浮氣を働く、それが馬鹿に行るので、御存じは無からうが、阿父さんの知合の中にも、はあ、強いのが在ります。然し、内の阿父さまに限つては那様悪戯をなさる事は萬々無い、無いが、悪い事が行つたものだ、流行となると、つい、それ、遣つて見たくなるのが人情、どうか然云ふ間違の無いやうにと、一人の親であつて見れば、私も是で好い加減取越苦勞をして居るとお思ひなさい。其の矢先の長襦袢！　さては親父も病付いたり……。

壽　馬鹿も休み〳〵言へ！

は　旦那さまの方は若旦那さまが御安心なさいまして、それでお宜うございまうが、私の方は如何が遊ばして下さいますんで御座います。貴方も若旦那さまとも謂れるほどのお方ぢやございませんか、七度捜して

から人を疑れと申すぢやございませんか。

延　阿父さんのを合せると十四度か、然うは私だつて根が續かない。成程お前も無實の罪を被せられたのは悔しからう、腹を立てるのも尤だ。而して又段々譯を聽いて見れば、お前の骨折と謂ふものは莫大なものだ。禮は改めて言ふよ、褒美は阿父さんの方から出るだらう。私が一寸疑つて見たからとて、何も悪氣が有つた辭ぢやなしさ、謂はゞ出合頭の飛相で、まあ、其の、露地に寢て居る犬の足を踏んだの見たやうなものだ。堪忍しろ堪忍しろと言つて了へば……。

は　あの、何と有仰います！　散々人に難癖を付けてお置きなすつて、犬の足だなんて、はい、私は如何せ犬の足でございます、犬の足が如何いたしました。

延　如何したか、それは踏れた方に聞いて見なくて解るものか。私は踏んだ方なのだよ。

は　咎も無いものを踏れゝば、犬でも怒りますで御座います。

延　だからお前も怒つたのだ。

は　若旦那さま、貴方は今何と有仰いました。堪忍しろ〳〵と言つて了へばと有仰つたぢやございません

か。犬にさへ謝るほどのお方が……。

延　おつと、皆まで宣ふな。案山子が悪けりや謝るよ。

は　いゝえ、單だ謝るぢや私は不承知でございます。並の謝るのとは違ひまして、上の者が下の者にお謝り遊ばすんですから、そんなら其のやうに廉をお立てなすつて下さいまし。

延　へっ、下駄屋が修行に出たやうに、異う足元を見るな。如何すりや廉が立つのだ、圓い玉子を四角にでも切つて遣らうか。

は　那樣物はいりませんで御座います。

延　だから茹でたのよ。

は　茹でたのなんぞは所嫌で御座います。

壽　何故食物の話を始めたのぢやらう。はすは何かい、詫の證に食物が欲いのか。は、は、罪が無くて可い、のう。

は　あれ、旦那さま、可哀さうな事を有仰います。

壽　然うではないのか。すると、何じやな。

は　私は若旦那さまからお詫の證として、唯今限り體替のお暇を戴きますで御座います。

壽　それは可かんと言ふに。これ、未だ着更へては成らんよ。延太郎、如何か爲んか、のう。あれ、着て了つたわな。

延　はすや、まあ〳〵待つたよ。然う、お前、主人を踏付けるものぢやない。

は　踏付けられたのは私こそ。私は何せ犬の足なんで御座いますもの。

壽　いや、決して犬の足ではないから。

延　馬の脚のお姫さま！　一寸恁う止めた。

とおはすが唐縮緬の帶を結める所を、左に右引張つて來て元の座に着せる。

延　それぢやお前は如何しても此の役は勤めないと言ふのかい。

は　馬の脚には勤め切れませんで御座います。

延　と謂つて、今お前に引退れた日には、さあ、大變、現に明日の朝から差支へる。其が解らないお前でも

なからう。所で、お前が勤め切れないと云ふのを、無理に此上遣つてくれとは頼まない。だから。此の處でぐつと話を切替へて、甚麽にもお前の勤められるやうにして、而してもう一息勤めて貰はうぢやないか。話は解つて居る、遠なものだらう。

は　私には些も解りませんです。

延　お前に勤められるやうにして宛行はうと云ふのだ。

は　へえ、然う致しますと。

延　元來お前が勤め切れない、切れないから御免を蒙ると云ふのは外でもない、優雄さんがお前を薔薇子とばかり思込んで、彼此深切な事を有仰る。ところが、換玉の悲さには、好いにも惡いにも巧く是の守をして、届ける處へ届ける迄は 些 の麁相が有つてもならないと云ふので、お前の苦勞は一通りや二通りではないのだ。

は　然やうでございますとも。

延　然る上に、お前も優雄さんのやうな紳士から彼此言はれるなんぞは、是は最終最初として、おはす一代

記には必ず繪入にして載るくらゐの者だから、お前も恐悦に違無いのさ。然やうでございますともと言はないかい！　所で、段々怀へ〳〵た其の恐悦が、斷然破裂に及びさうになつたので、間違の無い内に引退らうと覺悟をしたのは天晴だつた。是は勤め切れまい！　と解つて居るものを、無理に勤めろとは言難い。だから、其處を勤めてくれと言ふからには、其の恐悦が破裂して、間違が有つても苦しからずと爲やうぢやないか。

は　それぢや、あの、間違が御座いましても、あの、麁相が御座いましても、へえ、まあ、其はまあ、私は如何いたしましたら可うございませう。

壽　これ〳〵、延太郎、誠にお前には呆れて物が言へん、のう。

延　だから、貴方は何とも有仰らなくても宜しい、萬々私にお委せなさい。

壽　これ、物事を委せると云ふのは、な、是は確と信用をした時の事じや。

延　だから、信用をなさいまし。

壽　これ、信用すると云ふのは、な、安心が出來る時の事じや。

延　だから、安心をなさいまし。

壽　これ、安心を爲ると云ふのは、な、氣遣無いと見込だ時の事じや。

延　だから、氣遣無いとお見込みなさい。

壽　見込めるか、是が！　凡そ物を考へるには、まづ其の先から考へて掛るのじや、痴漢め。間違が有る？

間違が有つた時に單だ間違が有つたで濟むと思ふか。間違が有つたら如何するのじや。

延　そこらに如才が有りますものか。

は　本當に、若旦那さま、其時は如何遊ばして下さいますんで御座います。

延　はす、其時は。　とぐつと脂下り、

延　添はして遣らうよ。

は　えゝ、あの、添はして?!

壽　私が成らんよ。

延　可いから、阿爺さん、お委せなさい。總て私に、えゝ、宜しい。

壽　成らんよ。はすも成りませんぞ。

は　若旦那さま、如何いたしましたら宜うございませう。

延　私といふものが心得て居る。

は　屹度でございますね。

延　心得て居るよ。

は　本當に可いんで御座いますね。

延　悪かつたら代は戴かないとよ。

は　でも、それぢや餘りお孃さまに濟みませんで御座いますね。あゝ、嬉いやうな、勿體ないやうな、可恐いやうな、變に胸が悸々して參りまして御座いますよ。

（八）不機嫌の上

優雄
古里

古里遠高慢なる客體にて獨り葉卷を喫し居る。折から人目を忍びて入來る優雄。

春　おい、如何した。

古　あゝ、誰かと思つたら貴様か。

春　何を生利な！　誰も居りはせん。

古　令嬢は今湯に入りに行きました。

春　令嬢の行つた先を聞きは爲んよ。

古　はあ、大變御機嫌がお悪い。

春　あゝ、悪い。

古　えゝ、然うですか、はゝ、解りました。然し、それは、先生、餘り酷ぢやありませんか。當初に潔くお前に譲ると云ふ先生の言が有つたんでせう。

春　其が如何したのだ。

古　其が如何した？　私は答ふる所を知らずです。先生たる者の口から一旦譲ると斷言しておきながら、今更惜くなつて私を仇敵視なさるんですか。

春　誰が？

古　先生が。

春　何を言ふのだ！

古　然うぢやないですか。それぢや御機嫌の悪いのは？

春　色々有るのだが、先づ第一に、お前と云ふ者は徹頭徹尾野鄙極つて、それで何處が紳士と見えるのだ。俺が那の位言つたのぢやないか、敢て氣取らんでも可いのだ、唯總てに慎んで居てさへ貰へば。それぢや如何に何でも春山傑雄とは見えんよ。

古　けれどもが、令嬢は更に疑はんです。

春　那の令嬢だから疑はんのだ。彼が若し那の小間使であつて見るが可い、忽ち看破されて了ふのだ。

古　何ですか、先生。令嬢よりは小間使の方が人物が上だと有仰るのですか。

春　不幸にして身分こそ卑いが、其の性質に於て、其の容貌に於て、其の品位に於て、其の言語動作に於て、其の教育に於て、其の貞淑の風あるに於て、彼は到底召使ではない。其に引替へて、あの令嬢、那は

何だい！

古　何でも宜しいです。潔く譲るといふ先生のお言が有つた以上、又私が願し得る以上は、那の令嬢は私の物です。既に只今なども、互に胸襟を披いて、まあ止しませう、此際先生の感情を害するに過ぎんですから。

春　何有、俺は始から那の商徴子では感情を害して居るのだから、今更那様心配には及ばんよ。其は其で可いから、お前がもつと慎んでくれんければ可かん。紳士は紳士らしく、えゝ、他のハンカチィフなどを欲がるのは可くないから。

古　あつ、御存じですか！　然し、那も婦人を悦せる一端で、私が野鄙だの、慎まんのと有仰るけれど、那して令嬢の意が有る所を以て見ると、此上慎む必要は無からうと考へるですがな。

春　それだから那の令嬢は鼻持が成らんと謂ふのだ。お前は那を令嬢と見て居るのか。

古　令嬢ぢやないのですか。

春　此の娘だから令嬢ぢやあらうけれど。

古　此の娘でさへあれば、彼の六七萬といふのが利いて居ますからな。

春　幾計利いて居たつて、娘の物になるぢやなし、其の陋い了簡が既に紳士でないと言ふのだ。

古　いや、私は敢て紳士たらんことは望まんです。然し、左に右です、令嬢の大に愛して居ることは爭ふべからざる事實です、私はそれで満足して居ります。此の一兩日來令嬢の愛の度は非常に高つて來たのです、其が如何に高つて來たかは、先生に對してお話は爲難い、事ほど然やうに私は満足して居ります。

春　默らんかい！

古　はい。

春　誰もお前が満足か、不満足か、那様事を聞きはせんのだ。紳士たらんことをお前が望まうが、望むまいが、主人の權利を以て、然う遣れと命令するのだ

古　けれどもが、けれどもが、……。

春　けれどもがではない！

古　いや、然し……。

春　然しも何も要らん！

古　一寸そんなら申しますが、抑も先生が私に紳士らしく遣れと言はるゝのは、ですな、春山優雄たるの體面を汚さんやうにあれと云ふ事を意味するのでせう。

春　知れて居るわ。

古　然りでせう？　而して其の春山優雄は何等の者であるかと謂ふに、此の令嬢と結婚せんが爲に、而して又其の令嬢の爲人を詳悉にせんが爲に、百有三十一里の道を遠しと爲ずして、故々東上したと言ふのも餘り不見識であるから、外に用事を兼ねてと稱して、

春　那樣事を言はんでも可い。

古　事實如此にしてお出になつたのだ。して見れば、春山優雄たる者の體面と云つて差支無いのでありませう。

春　愚なことを言ふな。春山優雄の體面は春山優雄たるの體面の外に、何の爲の體面でもない。

古　けれどもが、今日の場合では其が重なる體面であることは決して疑を容れんです。さて、然うあつて見

ると、如何にしたら其の體面が最も善く保たるゝかと云ふに。結婚せんとする其人をして愛慕措く能はざらしむるに至るに如くは無いのでせう。此に由つて之を觀れば、ねえ先生、此に由つて之を觀れば。

春　煩い！

古　煩くても何でも、此に由つて之を觀ればでせう。

春　此に由つて之を觀るのは、結婚せんとする其人の如何に在るのだ。那麼愚劣な女には何とか思はれるだけ紳士の體面を汚すのだ。此に由つて之を觀れば、春山優雄の體面はお前の爲に汚されたのだ。

古　此に由つて之を觀れば、凡そ紳士の體面は、他の家の下女に愛するに於て最も善く保たるゝのでありますな。

春　設ひ下女と雖も其人の如何に在る。下女が如何したのか。大體あの蓮といふ婦人は、お前如きに下女などゝ輕んぜられるやうな者ではないのだ。

と優雄の不機嫌は益募る。

不機嫌の下

春山優雄
古里遠實はおはす

古　然し、下女は下女でありますからな。

春　他は如何でも可いから、自分を慎め。

古　失敬ながら先生だつて、下女輩に愛されるのは、餘りお慎みの方ぢやないやうに考へますが。

春　默らんか！　俺がお前の主人たる以上は、お前なる者は義として那の婦人を下女などゝ言へるのではない。福富家には下女であらうとも、春山優雄の心には神とも佛とも拜まれて居るのだ。それほどに主人の思ふ者を輕蔑するのは、取りも直さず主人を輕蔑するのだ。お前は主人を輕蔑するか。

古　いや、決して然云ふ事は、

春　無いと謂ふなら、今後那の婦人を下女と思はんか。これ、挨拶を爲んか、何を妙な顔をして考へて居るのだ。

古　あつ、先生、もうお默り下さい。來たです、來たです。

春　えゝ、何が來た。

古　令孃、令孃！　渴上りの令孃です。

春　うゝ、厭がりの令孃か。

古　先生もう〳〵お出で下さい。

春　居たつて可いさ。

古　先生がお在ぢや甚だ爲難いですからな、どうぞ彼地へお出で下さい。

春　可いさ。些と拜見しやうよ。

古　お出で下さらんと、先生、何を爲るか知れませんぞ、可いですか。

春　可いさ。

古　吃度ですな、宜しい！

入來るおはすは念入別製に粧り立てゝ、嬌〻〳〵と一擧一動も唯是令孃たらざらんを慴るゝが如し。優雄は其姿を見ると齊〻〳〵平伏して一禮するを、ぐつと下目に見て、

は　おや、お出でなさい。

古里は何がな窘めんと思付きて、

古　古里、貴様少し儀の肩を揉んでくれ。

春　はあ。

古　何を貴様は睨めるのか、早く此へ來て揉まんかい。令孃、此奴は按摩が餘程上手ですから、僕は内に居ると始終揉せて居るです。

は　それは何より重寶で御座いますね。けども按摩さんは色氣が無いぢや御座いませんか。それよりは何か隱藝がお有なさりさうな柄ですことね。

古　貴様、何か隱藝が有るか。

春　有りません。

古　ホウカイと云ふの、那は如何だ。

は　あら、ホウカイ節？　是非聽きたいものですね。

古　僕の肩を揉みながらホウカイ節を遣つて見い。

春　那樣事は一向心得ません。

古　ねゝ、這奴惡く氣取るな。令孃、貴方の前だものだから極が惡いのです、意氣地の無い奴な。

は　本當にね、お前さん一つお遣んなさいよ。

古　遣れよ。

春　遣れよぢやありません。な、それ、先生の體面を汚します、馬鹿な事を有仰つては可けません。

古　馬鹿な事とは何か。然云ふ失敬なことを言ふ奴は猶赦さんぞ。遣れ、遣れ、さあ、遣れ。

春　先生は那麼事を有仰るのですけれど、私は何も出來ませんので、甚だ迷惑いたします。どうぞお孃さまから先生へお執成を願ひます。

は　然う、全くホウカイは行けないんですか。

春　一向不調法でございますが、若し私が出來ましたら、お孃さまは其を唄はしてお聽になる思召でございますか。

は　おや、可厭に突掛る人ね。那樣難しい事は知りませんよ。

古　眞に然うです。可厭に突掛る奴だ。那樣難しい事は令孃は御存じ有るものか。

は　本當に可厭な方ね、怖い顏をして他を視て。私は怖いわ。

と少く席を居去る。

古　怖ければ、さあさ僕の傍に來たまへ。古里、貴樣は全體他を見る顏が怖くて可かんぞ。ちと氣を着けい。而して貴樣は此頃不機嫌な面をして居る、他の事は徹頭徹尾野鄙極るとか。紳士の體面を汚すとか、或は某處の令孃は愚劣だとか、偉さうに言ふけれども、我が面を見い。然云ふ不埒な面をして、令孃を見るなどゝ云ふは、第一失敬千萬の至だ。顏色を改めてからにもう一遍謹んで見直せ。

春　私風情が餘りお見上げ申して、御器量でもお惡くなると可けませんから、是は却つてお斷り申します。

は　變にお言ひなさるぢやありませんか。お前さんに見てお貰ひ申さなくても、はい、私は始から不器量なのですわ。

古　まあ〳〵、令孃。古里、貴樣は愈怪しからんぞ。令孃に對して不器量とは何か！

は　いゝえ、私は不器量に違無いのですから、それで可うございますとも。而して誰も古里さんの御妻君にならうとは申しませんから、決して御心配には及びませんの。

古　まあ〳〵、令孃。古里、貴樣は實に怪しからんぞ。

春　何時私がお孃樣を不器量だと申しました。貴方等は何處に耳を付けて在つしやるのです。

は　あれ、あの通り、耳さへ滿足に付いてゐないやうに言ふぢやありませんか。

古　成程然うだ。貴樣は令孃を侮辱し、併せて僕を誹譏したぞ。さあ、果して令孃は不器量であるか、耳の附き所が違つて居るか、能く目を開いて、謹んで見直せ。

春　御器量の優れてお在なのは勿論、お耳も至極御滿足に、ふつくりと好い恰好に出た鬢の下に相違無く附いてお在です。

は　今日の鬢は些も好い恰好な事はありませんよ。何でも那云ふ皮肉を言ふのですもの。

古　貴樣皮肉を言つては可かん。好い恰好でもないものを好いなどゝ言ふのは、貴樣が謹んで見んからだ。更に改めて謹んで見直せ。

春　然やうなら見直します。

と優雄は開き直つておはすを視る。

は　又那麽怖い顔をして。

古　未だ怖いですかな。貴様、顔色を改めろと言ふに、何故か。

春　それでは恁云ふ具合ですか。

は　未だ怖いわ。

古　未だ怖いさうだぞ。貴様、氣を着けんかい。

春　もう是よりは出來ませんですから。

と又見遣る。

古　令嬢、是は如何ですか。

は　未だ怖らしいのね、

古　貴様、もう少しだ、碇り遣れ。

春　大概にして措いて下さい。

と又出直して見向く彼方の障子越、忍寄りたる薔薇子の顔が硝子を透さて見ゆるを、優雄は恍然と眺めて居れば、おはすは又吾を忘れて其の顔を熟と見入る、其の又顔を古里が熟と見入る。旋て優雄が薔薇子と目授すれば、おはすも見取るゝ餘に其を傳へて目授する。同じやうに古里も目授する。

（九）　共ふさざ　實は優雄　實は薔薇子

優雄卷莫を燻しながら如何にも濟まぬ顔にて考へ居る。薔薇子は其傍に膳を据ゑ、通盆を持ちて、

薔　貴方、御飯を召上りまし。

雄　はい、難有うございますが、私は戴きたく御座いませんですから、どうか此儘お下げください。

薔　何處かお加減がお惡いので御座いますね。今朝唯一膳上つた限で、お晝食も全で上らずに、晩も亦恁うして……本にお顔色も勝れず、鬱いでばかりお在のやうでは御座いませんか。

雄　はい、何と無く此の胸が切なくて耐らんのです。

薔　それは、まあ、可けません、お痛みなさるので御座いますか。

雄　格別痛むでもありませんがな、左の肺が怎う……何か提灯のやうになつて、右の肺がぐつと重くなつて、釣鐘でも下げたかと想ふやうな心持で、究竟兩方の釣合が取れん所から、氣が鬱いでならんのです。

薔　あの、それぢや依様肺病なので?!

雄　まあ、そこは肺病のやうでもあり、氣の菰蘊する所は腦病のやうでもあり、胸が一杯になつて張裂けるやうな所は心臓病? 物の食べられん所は胃病ですか知らんて。夜寢られん所を見ると神經病も有るでせう。

薔　そりや、まあ、大變ぢやございませんか。何でもお體は大事になさいましよ。而して、貴方のやうな方には幾多でも好い御妻君が御出ですから、お體を大事に御勉強なすつて、早くお美しい方をお迎へなさいまし。是限お目に懸りませんでも、之を御縁に私は陰ながら貴方の健康を屹度祈つて居りますから。

雄　辱い! 然云ふことを聞くと猶の事……あゝ、左肺の提灯が飛揚るやうだ。

と薔薇子の打萎るゝ姿を見て、

雄　あゝ、可愛い提灯! けれども提灯ぢや……提灯ぢや如何も……えゝ、提灯、提灯!

と身悶して口惜がる。薔薇子は此聲に駭きて、

薔　はゝ、衝心?! 衝心ですか。

と思はず優雄に縋り付くを、熱と抱緊めて

雄　何有、提灯ですよ。

薔　あゝ、然うでしたか。

と遲に心着きて男の手を振拂ひ、ちやつと退いて居住を直す。

雄　提灯の傍は熱いですか。

薔薇子は物をも言はず考へ居る。

雄　那様に熱ければ消しませうよ。

と優雄も後を向けて默つて了ふ。薔薇子は溜息を吻き、匆と男の方を見遣りしが、段々と覗きながら居去寄

つて、又思案に沈めば、同じ思の優雄は同じ事を爲て、交互に居去寄り〳〵する間に行違ひて入替りしと
も知らず、

雄　往くなら往くが可いさ。愁ひ顔を見るのは思の種だ。

薔　あゝ、どうしても私は思切れない、と言つて、餘り身分が違ふから、添ふには添はれず。

雄　と言つて、此に居れば、顔を見ずには、居られず。

薔　本當に好かないのは、（と憤れたさうに聲を立てゝ、）那の春山！

雄　見たくもないのは、（と舌打をして）那の薔薇子だ！

と双方同時に名を呼れて、にゝと吃驚、顔を見合せ、

薔　あつ、貴方は其處に！

雄　うつ、其處に貴方は！

あゝ、未だ其處にお出でしたか。

薔　はい、未だ居りました。

雄　好く居て下すつた。御用が無ければ、まあ寛りお話しなさいましな、いや、是は氣が着かんでしたが、
貴方は未だ御膳前でしたな、どうぞ上つて來て下さい。

薔　いゝえ、宜しいのでございますよ。

雄　宜しいことは有りません、外の事と違つて食事は極つたもので、其の時間には上らんければ可けません。

薔　然う有仰る貴方こそ。

雄　私は別です、私は物が喉に通らん譯が有るのですから。

薔　私だつて物が喉に通らない譯が有るので御座いますから。

雄　貴方も？　然うですか。

薔　私は二三日以來陸に物が戴けませんので、蜜柑の液ばかり吸つて居ります。

雄　それは御難義でせう。何處かお惡いのですか。

薔　いゝえ、ちつと苦になる事が御座いますので、夜も陸に寢は致しませんわ。

と熟と俯いて溜息を吻く。

雄　何！　陸に夜も寢ず、畫は蜜柑の液ばかり吸つて、而して苦にして居る事が有ると有仰るか。

と氣遣はしさうに乘出して、

雄　私も覺が有る！　私も實は陸に夜寢ない、而して畫は莨ばかり喫して凌いで居るので、眩暈がしてならんです。

薔　然やうで御座いませうとも。私は又舌が粗れて、おゝ痛い。

雄　貴方が其の纖細い體で、蜜柑の液ばかり吸つて苦勞をして居られては耐るものではない。

薔　實に耐りませんの。

雄　耐りますまい！

薔　耐りません！

雄　而して貴方の其の苦になる事と云ふのは？

薔　是ばかりは親にも私は話せません。

雄　恁云ふ微力の一書生ではありますが、私で出來る事ならば、貴方の爲に何か一つ竭したいと考へるのですが、私へお話し下さいませんか。

薔薇子は默つて鬱ぐばかり。

雄　私も二三日内には還らうと思ひます。

薔　えゝ！　と驚く。

雄　それで、逗留中は何彼と心着けてお世話をして下すつた、貴方の御深切は躬に浸みて私は忘れません。其のお禮やら、置土産やら兼ねて、何ぞ貴方に爲て上げたいのですから、若し差支無くば其の苦になる事と云ふのをお聞き申して、及ばずながら一臂の力をお假し申したいのです。其をお聞き申さん内は私も苦になつて、どうも此儘お別れ難い。

薔薇子はわつと泣伏す。

其の姿を凝然と眺めて優雄は腸九廻の想。薔薇子は涙の顏を振擧げて、衝と居去寄る。

薔　二三日中にお歸去なさるので御座いますか。

雄　いつそ、もう明日歸ります。

薔　あの、明日！　と又泣伏す。

雄　吁、提灯に釣鐘！　提灯だから困る。どう考へて見ても提灯ぢや困る。是が提灯でなければ、せめて燈籠ぐらゐだと、石燈籠でも可し、金燈籠なら猶可し、あゝ、提灯、然し綺麗に好く出來た提灯だ！　極彩色の岐阜提灯、勅使河原でも別製の方だ。嗚呼、見れば見るほど、……釣鐘が割れるやうだ。

と頭を抱へて思案に昧れる。此時漸く面を擧げたる薔薇子は、男の姿を打目戍り、

薔　えゝ、もう私は如何したら可からう！　此人が彼人で、彼人が此人でありさへすれば、何の事は無いのだけれど、彼人が彼人で、此人が此人だから、吁、もう〳〵世の中が可厭になつて了つた。幾許思ふやうにならないのが世の中だと云つても、餘り思ふやうにならな過ぎるわ。明日歸るとお言ひだけれど、私は還しはしない、二三日中なんぞにも還しはしない、せめて私の思切れる迄、斷念の付く迄は、甚麼にしても還しはしないわ。いよ〳〵是で可いと、悉皆忘れて了ふまでは、私は留めて置く。けれども、如何あつても私は思切らなければならないのかねえ、――諦めなければならないのかねに。私は是ばかりは忘れられさうもないわ。と又泣伏せば、む〳〵と優雄は首を擧げて、

雄　如何考へて見ても到底可かん！　何に爲ろ提灯に釣鐘は、社會の制裁が許さんもの。而して又、迚も無い縁なら潔く斷念すべしだ。而して又、此者ばかりが女ではなし、世間には降るほど類が有るのだ。勢已むを得ずして斷念せざる可からずと極つたら、俺も潔く斷念する、おゝ、斷念する！　俺も社會に出たからには、夙て盤根錯節に遇ふのは覺悟して居た。今後如何なる艱難の出で來るやも測り難いのに、高が一婦人の愛の爲に俘となつて、死を覓めて得ず、活を求めて得ずと云ふ此の有樣は、抑も何事だらう！　苟も有爲の士たる者は、恁く有るべき譯のものではない。盤根錯節と云へば極めて堅いもの、提灯と云へば極めて輕いもの、其の極めて堅い盤根錯節にさへ遇はんとする者が、一箇の岐阜提灯を踏破り得んやうでは、俺の前途も知るべしだ。踏破る、うゝ、踏破る、踏破ると事が極つたからには、潔く踏破る！

と大きに力みながら薔薇子の泣伏す姿を見れば、附景氣の覺悟は忽ち鈍る狀。

薔　あゝ、古里さん、私は如何したら可うございませう！

と思迫つて擦寄れば、優雄の方からも擦寄られに居去出る。

雄　それはもう如何なりと爲て上げますけれど、何を如何して可いのだか解らんぢやありませんか。さあ、

それだから、貴方の苦になる事と云ふのを話してお聞せなさい。

蕎　是ばかりは本當に親兄弟にも打明けられませんのですから、御深切は難有う存じますが、

雄　話されんと有仰るか、あの、如何あつても？

蕎　は……はい。

雄　あゝ、そんなら可う御座います。私は貴方の御深切が身に浸みて、他人のやうには思はれんほど貴方の身上を案じて居るのですから、冗くお聞き申すのも思過しからです。それを貴方は更に汲んで下さらんのだ。私の心は空家の内井戸で、どうせ誰も汲んでくれんのだ。

蕎　それは私は十分汲んで居りますわ。

雄　何有、手桶は空の癖に。

蕎　はい、其の手桶の空なのは、

雄　はい、其の手桶の空なのは？

蕎　餘り一杯入れ過ぎたものだから、疾に罅裂けて了つたのぢや御座いませんか。

雄　那樣樣子は有りませんでしたよ。

蕎　罅から幾度も目から其水が零れて居るでは御座いませんか。

雄　うむ、如何樣！

蕎　言はぬは言ふに增す思なので御座いますわ。

雄　うむ、如何樣！

蕎　えゝ、此の切ない胸の内！　如何したら可いのでございませう、ねえ。

雄　うむ、如何樣！

蕎　私とても貴方の御深切は身に浸遍つて、忘れやうにも忘れられないので御座います。

雄　うゝ、成程！

蕎　折角然うして有仰つて下さるのですから、私も此の胸の内をお話し申したいのは、それは、もう山々なので御座います。

雄　うゝ、成程！

薔　それが仔細あつてお話が出來ませんので御座いますから、どうぞ惡からず思召して下さいまし。

雄　うゝ、成程！　……と言ひたいが、其の（仔細あつて）が嬉くない。是は何分にも私には惡からず思はれませんから、其の意で居て下さい。

薔　いゝえ、私は其の意では居られません。

雄　貴方が其の意で居たくないのなら、居ずに在れるやうにして居ないが宜しいのです。

薔　もう一遍有仰つて下さいまし。

雄　幾度でも言ひます。貴方が其の意で居たくないのなら。

薔　はい。

雄　居たくないのなら、ですよ。

薔　はい。

雄　待つて下さい、居たくないのなら……然うです、居たくないのなら。

薔　はい。

雄　然う混返しちや可けませんな。

薔　いゝえ、唯（はい）と申したので御座いますよ。

雄　此際（はい）も可けません。

薔　はい。

雄　可けませんと云ふのに。

薔　は……。

雄　可けま……。

と互に見合つて息を止める。

雄　それでは恁云ふのです、貴方が私に惡からず思つてくれとお言ひのでせう、けれども惡からず思ふ譯には行かんやうな事をして置きながら、それで惡からず思へと云ふのは、貴方が餘り手前勝手過ぎる、那樣愚しい註文は御免を蒙るのです。

薔　然う有仰れば一言も御座いませんのですけれど、是には仔細有つて。

雄　親兄弟にもお話をなさらん――毎々伺ひます。

薔　それに又此事ばかりは決して口外はしまい、と自分の心にも誓ひましたのですから、どうも今更お話し申しかねるので御座います。

雄　大きに御尤、然し、貴方は話をしたいのは山々だとお言ひでしたね。

薔　山々なので御座いますもの。

雄　では、心持は打明けたいのであるが、口外しまいと誓を爲すつたものだから、それで、お話が出來ないと、恁う有仰るのですな。

薔　然うなので御座います。

雄　では、口外さへなさらんければ、究竟可い譯なのです。

薔　それは何云ふ譯なので御座いますか。

雄　まあ、宜しい、それから極めて下さい。

薔　はい、口外さへ致しませんければ。

雄　可いのでせう。因で、口外と云ふ字は口の外と書く、でせう、口の外へ出すと云ふ意味でせう。すれば、口の外へさへ出すのでなかつたら、外の方法で打明ける分には差支無いと謂つて宜しいのだ。紙に筆といふ重寶な物があります、一寸書いて見せて下さいましな。

薔　まあ、お待ち下さいまし、書きますのも猶且、あの、然う〳〵〳〵〳〵、書きますのも口外と同じ事で御座いますもの。

雄　書くのが口外と同じとは？

薔　書くと云ふ那の書の字は、下の方に曰と云ふ字が附いて居りますです。曰は即ち口外でございます。

雄　うゝ、是は……。

薔　と咽と塞りしが、旋て小膝を拍つて、

雄　いや、未だ有る。筆くのが可かんとあれば、爰に形語と云ふの、是は一言も言はずに手眞似や身振の働で事が解るのです。爲形で見せて下さいまし。

薔　然う云う事は私は存じませんのですもの。

雄　何の雑作も無い事で。一寸例を擧げて見ると、（福宮の召使、はす）と云ふのは這麽鹽梅に遣れば可いので。

と頰を膨して息を吹き、

雄　是がふくです。それから、

戸を引啓ける眞似して。直に小手を翳して前面を眺める。

雄　是でと（戸）み（見）になります。のと云ふ時には一寸喉に指しをするので。次は、

飯を掻込むが否や顏を蹙めて胸を拊く眞似。

雄　めしつかへ巧いものでしよ。後が（はす）。（はす）はそれ、

と齒を叩いて、息を吸ひ、

雄　這麽ものです。一つ遣つて御覽なさい。

薔　設ひ口外致さない迄も、私は胸が貴方に知れましては、それぢやお話を申したも同じことで御座いますもの。

雄　いや、決して然うでありません。今のは那は以心傳心の法なのですから、貴方が知せやうと爲たのでもなし、又私が知らうとしたのでもない、唯何と無く双方の心と心とが通つたので、譬へば彼のニウトンの林檎のやうなものでせう。あの林檎先生、那は何も、あゝら御覽じろ、地球の引力は是でございと云ふので落ちたのではありませんよ。又ニウトン先生にしても、此林檎落ちるに相違なしと始から知つて、あの木の下に行つて居たのではない。若し然うと知つて居たら、先生屹度皿にナイフを以つて待つて居たらうに、古今どうも那樣面は見ませんね。林檎も茫然落ちたのだ、先生も茫然見て居たので、所が是が引力の大發明となつたのは、それ以心傳心！　林檎が引力の原理を口外したのではありますまい、ニウトン先生が林檎を捉へて、是非聞してくれと口説いたものでもありません。然し、謂つて見れば、林檎の胸には夙て引力の原理は在つたので、落ちたのは形語をしたのですね。

薔　大相面白いお話でございますこと。

雄　褒めるばかりぢや可けません。是非林檎の心意氣になつて下さい。

薔　私のやうな者に林檎なんて那樣洒落た物は格に合ひませんので、精々唐茄子ぐらゐの所で御座いますわ。

雄　唐茄子が落ちるのは困りますな。唐茄子が棚から落ちてニウトンが頭を撲れる、是は引力よりは脊藥の發明になるのでせう。

薔　那麽御常談ばつかり。

雄　さあ、どうぞ林檎の心意氣を。

薔薇子は何やら思案して居る。

雄　さあ、どうぞ。

薔　未だ少し熟さないので御座います。

雄　ちや、ニウトンもそこらを彷徨して居ませう。

と莫を吸付ける。

薔　林檎の事でございますから、甚麽落ち樣を致すか解りませんです。そこを解釋なさるのは先生の學力で御座いますよ。

雄　心得て居ますが、風で落ちないやうにして下さい。餘り遠くへ飛んだり、目潰を吃はしたり爲るのは

困りますから。

薔　どうせ不器用でございますから、唐茄子の方だと思召して下さいまし。

雄　では、唐茄子ぐらゐの林檎として措きませう、北海道にも那樣のは無い、お珍しいものですな。

薔薇子は起つて何やら支度のある樣子。

雄　是は御趣向ですな。待つて居ました！　親玉の大林檎！

薔　さあ、宜うございます。

と砂糖を紙に包みたるを見せる。

雄　成程。ビリ〳〵シリツピリイボン。

と西洋手品の呪を唱へながら其の上で出縱の印を結ぶ。

薔薇子は●件の紙包を三度振り、續いて二度振り●兩手にて顎の下を劃りて見せ●鍬を持ちて地を掘る狀を爲し、其の跡を眺めて、一寸首を傾け、粟餅でも搗るやうな手付をして、一つ投げ、二つ投げ●それを拾ひて結合さんとして結ばれぬを、熟と考へ居て●忽ち後の方を見遣り、はたと小膝を拊つ。

薔　私の苦にして居りますのは是でございます。

雄　はあ、然やうですか。此の林檎は嵐か何ぞで吹飛んだ蹴梅ですな。

薔　いゝえ、決して那樣着意ではないので御座いますが。

雄　いや、ニウトン一つ考へて見ませう。

と薔薇子の爲た通りを眞似ながら一心不亂に考へ居る。

薔　それは然うと本當に二三日中にお歸りなさいますのですか。ねえ、貴方、古里さん、那は御常談なので御座いませう。

雄　恁う握つた奴を恁う摘んで、ひよいと投げのひよいと投げ、それを拾つて結ばうとしても結べない。

薔　あれ、古里さん。

雄　結べないから、考へたかな。それとも、如何かして結びたいと云ふので、考へたかな。結びたいは氣に入つた。結びたいので考へたとは、ちえゝ、不便な奴！

と思はず見向く途端に顏を合せる。

薔　古里さん！

雄　はい、はい、はい。

薔　二三日中にお歸りなさると有仰つたのは謊で御座いませう。

雄　私は明日歸ります。

薔　えゝ、そりや本當で御座いますか。

雄　明日は歸ります。歸る迄に是非これは考へて了ひたい。紙に包んだのは砂糖で、之を三度振りの二度振り。

と夢中になつて爲形をして居れば、明日歸ると聞きし薔薇子は氣が氣でなく、

薔　あゝ、是は何としたら可からう。いつそ兄樣に打明けてと。

と起つて行き掛けしが、

薔　如何に何でも自分の口から那樣事が。

と小戻して、傳雄の姿を見れば又氣が變り、

薔　此のまゝ別れて了へば、いくら後では戀しくても、……えゝ、私は思切れないわ。

と又行き掛けては考直して立戻り、又行き、又戻るを、優雄は一三昧に例の爲形をして居たりしが、漸く見着けて、

雄　貴方、如何なすつたので。

薔　はい、あの、何だか引力にでも引れて居るやうで御座います。

雄　それは大變！　林檎の落ちるのとは違つて、横へ利くところを見れば尋常の引力ではない。

薔　尋常の引力ではございませんとも。

雄　何とか發明したいものだ。

薔　其の發明が出來ませんので、噫、是はニウトンにも出來は致しません。

と猶行きつ戻りつする中竟に眩暈を起してばたりと倒れる。優雄は駈寄りて、

雄　あ、もし、如何なさいました。

薔薇子は額を抑へて苦しげに息を呵く。

雄　安心なさい、依様地球の引力でした。

（十）道端

春山優雄
古里遠

然る程に春山主從は遲に福富家を發足して、七八町も來たる途中。優雄は件の書生扮裝のまゝにて先に立ち、古里は紳士姿にて大鞄を提げながら疲々曳々之に隨ふ。

古　えゝ、先生、一體是は何云ふ譯なのでありますか。昨夜まで何等の御内諭も無くて、今朝になつて突然、歸るのだから支度しろは、實に百鶯を吃しましたな。此の不意撃には味方さへ荒膽を拔れたですから、彼處の家内の狼狽といふものは、殆ど目も當てられんでした。

それに、今日の貴食には、令孃の誕生日だと云ふので、何か空前絶後の馳走を爲る趣で、他も大きに心配して居つたし、此方も實は樂みにして居つたですから、切めて其の豊飯を食つてから立ちませう、と那程然う申したのに御聽入が無い。私が食ひたいばかりではないのです、他だつてそれ〳〵支度をしたので有つて見れば、折角の心配が無駄になる、であればこそ那して皆が寄つて擧つて拜まんばかりにして留めたので

はありませんか。那を振切つて出て來られるとは、之をしも忍ぶ可くんば何をか忍ぶ可からざらんでせう。私は居たかつた！　敢て食ひたいばかりではないですよ。然し、仄に令孃から聞く所に由れば、二の膳付でもつて金蒔繪の膳椀で、料理の數が十五通、其上に一斤五圓の薄茶に菓子が出るのです。之に酒と飯と香物とを併せれば、總計二十品、嗚呼、盛なりと謂ふべしではありませんか。此の二十品を綺羅星の如く前に並べて、それこそ縱横無盡に食立て飲立て、此を先途と嬰くことを知らなかつたら、愉快淋漓として飛躍禁ずる能はず、恰も彼の――虎は搏にすべし、蛟は斷つべし。腰間の秋水凜として氷の如し。

と吟ずる中に、いつか鞄は置いて劍舞を始める。

古　四方之志は人の識る無く。八斗之才は鬼愒に逼る。

と益調子付いて、差す手の餘勢に優雄の脇腹を丁と拂へば、先より前後不覺に鬱ぎ居たりし優雄は始めて心着き、

雄　何の眞似だな、豈日中往來端で！　氣でも違つたのか。

古　はい、氣も違ひませう、恐くは氣も違ふでせう。氣の違ふのは、私一人に止らんだらうと考へます。

雄　うゝ、それは私にしても胸が張裂けるやうだ。

古　先生と私との二人には止らんだらうと考へます。

雄　おゝ、好く言つた。それゆゑイ便が彌增すのだ。

と忽ち想出して例の形語を始める。

古　いよう、先生も違ひましたな！　それは何の眞似ですか。先生、先生。是は可かん、是は全くお違ひですな。

優雄は夢中になつて考へ居る。

雄　可いか、紙に包んだのが砂糖だ。

古　是は愈變だ！

雄　此の紙に包んだのをチョイ〳〵〳〵と三度振つて、チョイ〳〵と後で二度だ。

古　變、變！

雄　此が最も解り難いよ。後が、それ、是の、是の、是の、是の、是の、是になるのだ。

古　いや、全く違つた！　那麼妙な手付や身振などをしては、後で熟と考込んで居られる樣子は、既に立派なものだ。や、又始められた！

と言ふ傍から後を續けて、はたと小膝を拊つ迄遣つて了ひ、

雄　解るまい。

古　解りません。其が解つては、私も入院のお供を爲んけりやなりません。

雄　いや、解らんことは無い。彼の心無き林檎だらう。

古　甚麼林檎ですか。

雄　西洋林檎よ。

古　西洋林檎が如何したのですか。

雄　落ちたぢやないか。那をお前は知らんのかい。ちと本を讀まなければ可かんね。

古　うゝ、これは全く狂です。いや、因で解つた！

雄　解つたか！　感心々々、如何お前は判じた。

と飽くまで件の形語に心を寄せて居る。

古　えゝ、解りました。昨夜まで沙汰無で、今朝になつて突然、歸るのだ歸るのだと膝座から烏の起つたやうな騒、はて、可笑いわいと思ひました。

雄　そこは大きに尤だ。うゝ、それから。

古　是が何も山中に日を暮して、怪げなる孤屋に一夜の宿を頼んだのではないですから、竟に賊の棲家と解つて、命が殆い譯も無いのです。然るに先生の那の慌て方と云ふものは如何です。もう那の時が既に違つて居られたのです。然う氣が着いて見ると、紙に包んだ砂糖や心無き西洋林檎の如きは敢て怪むに足らんですな。噫、然し、お可傷い事であります！　君は有爲の才を抱きて猶且春秋に富めりと雖も、悲い哉、天の憎む所となりて、不幸緣談中にして發狂せり、……。

と祭文を讀むやうに節を付ける。

雄　何を言ふ！　誰が不幸緣談中にして發狂したのだ。誰にも怪しからん事を言つたものだ。

古　決して謊に言うたのではありません。

雄　ほ悪いわ。

古　では、先生お氣は確なのですか。

雄　何處に不確な所が在る。

古　然らば伺ひますが、何故這麼事になつたのですか、いづれ理由が有るでございませう。先づ其を承つて、成程と了解する迄は、私は先生を發狂者として取扱ひますから、然やうお心得下さい。

雄　おゝ、突然に出立した理由か。其の理由は、彼の胸の内ではないが、實に謂ふに謂はれんのだ。

古　彼とは何でございますか。

雄　彼か、うふ、ふ、ふ、ふ、彼と云ふのは、ふっふっふっふっ。

古　として取扱ひますから、然やうお心得なさい。

雄　さあ、彼と云ふのは……代名詞だわ。

古　はい、彼と云ふのは、代名詞、下女と云ふのは普通名詞、如何でありますな。

雄　おゝ、然う、然うだ。

古　それから又お蓮と言ふと、是は固有名詞です。如何でありますな。

雄　然う、然うとも。

古　其の固有名詞の件で御座いますか。

雄　如何にも其の固有名詞、其の固有名詞と代名詞の一人稱との關繫なのよ。

古　ですけれどもが、關繫にも二種有ります、曰く普通關繫、曰く特別關繫と。何方に屬するので。

雄　さあ、普通の如くにして特別、特別の如くにして普通かな。

古　はあ、胸に應へる。世間には類似の事實が有るものですな。

雄　世間には之に似た事は古今幾多も有る。因で、儘ならぬ憂世とは、噫、好く言つたものだな。

古　儘ならぬ浮世とは、噫、好く言ふたものです。私の方の作戰計畫も今日明日が機一髮と云ふ所で、既に佳境の又佳境に入りつゝ有つた處を、此の唐突の御出發で、萬事休すと成つて了うたです。もう一兩日、長くとは言ひません、僅もう一兩日の時を與へて下すつたら、那の令嬢は一躍して古里薔薇子となり、此の古里遠は忽ちにして福富壽右衛門氏の女婿となり、でせう、然う成つて見れば、大事の女婿を他の玄關

に預けて置いて、それで陸な修業が出來るものではない、となるでせう、早速引取れて、段々樣子を見ると、此の女婿なる古里遠が天稟の英才驚くべきもので、優に明治の一大人物と、爰に始めて認めらるゝ、となるでせう。然う成つて見れば、到底日本如きで此の偉人を敎育することは出來んからと、話は進んで、海外留學となる。是は其の、舅の費用で留學する婿であるからして、名けて舅費婿と云ひますな。是から佛蘭西の飛脚船スマナイ號に乘込んで、目指す港は馬耳塞、十五海里の速力で、横濱埠頭を離るれば、殘る烟が癖の種、喃、吾が夫よ……。

と既に振事に及ばんとする所を、優雄は見かねて突飛す。

雄　お前は如何したと云ふのだ！　馬鹿も大概に爲んと、以來發狂者として取扱ふから、然う心得ろ。

古　然し、先生、私のは發狂の原因が解つて居るですから、未だ是で療治が爲好いで御座います。

雄　私のでも解つて居るのだ。唯解らんのは。

と又形語の手付を始める。古里は凝然眺めて、呆れた口が塞らず、

古　先生、それは一體何ですか。

雄　發狂の原因は總て此中に秘してあるのだ。

古　けれどもが、抑も其は何ですか。

雄　是か。是は以心傳心と云つて。依樣暗號電信の類だな。

古　而して、其の電信は何處から掛りましたのですか。

雄　うふ、ふ、ふふ、昨夜掛つた。

古　固有名詞からですな。

雄　はっはっはっ。

と猶止まずに例の手付を爲ては肝膽を碎き居れば、見やう見眞似に其の手を覺にて、古里も竟に始める。

雄　よう、巧い！　巧い〳〵！　巧いものだ。もう一遍遣つて見な。然うだ、然うだ〳〵。それで、如何だ、解つたか。

古　更に解らんのです。先生はお解りになりましたか。

雄　更に解らんのだ。

然う聞いて古里は又始める。

雄　いや、もう止せ、止せ。解つた所で儘ならん憂世だ。儘ならん憂世と諦めたから恁して歸るのだ。恁して歸りながら恁して諦めんと云ふのは不都合な話だ。我々は歸るのだ、歸るのは諦めたのだ、解つたか。

古　はゝあ、それでは何ですか、恁してお歸りになるのは、お諦めなすつたからですか。して見ると、恁して急にお歸りになるのは、急にお諦めなすつたのでありますな。

雄　可いから、もう行かうよ。

と諦めかねたやうに萎れ返る。

古　はてな、然う急にお諦めなすつたと爲ると、是にも大きに理由の有つて存するやうに考へられますな。抑も諦めると云ふ言は、多少失望の意を含んで居りますてな。

雄　失望？　おゝ、失望とも。

古　そこで、失望と云ふ言は、思ふやうに事が行かん時の心持を謂うたものでありませう。

雄　然う。

古　して見ると、先生、失敬な申分かも知れんですけれどもが、先生の方はお出來にならんかつたと見えますな。

雄　出來なかつたとは？

古　失敬ながら、お話が付かんのでしたらう。

雄　話が付かんとは？

古　彼とです。

雄　彼と話が付かんとは？

古　先生は彼を愛してお在なのでしたらう。

雄　彼をかい、……然う。

古　所で彼は應じましたか。恐くは先生の得點は唯一票の自選と來たのでせう。因で。

雄　待てよ。

古　失望となり。

雄　待てと言ふに。

古　諦めとなり。

雄　待て〳〵〳〵。

古　終に歸るとなつた辭なのでありませう。

雄　待てと言つたら待て！

古　はい。

雄　彼は應じましたか。恐くは、とは何だ。人を見て物を言へ、春山優雄たる者が召使風情を相手にして、其を心に從はせることが出來んと思ふか。文事有るものは必ず武備ありだぞ。能はざるにはあらず、爲ざるなりだわ。

古　それなら何を苦んで失望をなさるのですか。先生の彼を愛して居られたのは事實でせう。而して其の件に就いて失望して居られるのも事實でせう。彼を思ひ此を念へば、斷じて、爲ざるにはあらず、能はざるなりです。噫、お諦めになるのも御尤、失望なさるのも御尤、お歸去になるのも御尤であります。

雄　えゝ、要らざることを言ふな。お前如き者に紳士の理想は解らん。紳士には名譽といふものが有る、德義といふものが有る、其の名譽、德義の爲には身を殺しても敢て爲ざる事が有るのだ。彼に對する件の如きは最も其の適例なのだ。能く考へて見るが可い、春山優雄が他家の召使を心に從はして、それで後は如何する。

古　折角可愛がつてお遣りなさいましな。

雄　折角可愛がるとは如何可愛がるのだ。

古　如何と謂うて、それは説明の限にあらず、各自ら力を用ゐるべき點ですからな。

雄　解らん、更に解らん！

古　はっはっはっ。

雄　長く愛すると謂ふのか。

古　はっはっはっ。

雄　夫婦になると謂ふのか。

古　はっはっはっ。

雄　お前の言ふのは其の意味だらう。

古　はっはっはっ。

雄　何を笑ふのか、可笑くもないのに。然うか、其の意味か。

古　勿論！

雄　はっはっはっ。

古　これは怪しからん。はっはっはっ。

雄　解りもせんで。はっはっはっ。

古　例方が解らんのですか。はっはっはっ。

雄　お前が解らんのよ。はっはっはっ。

古　はっはっはっ、解るも解らんもないちやありませんか。愛して居ればこそ心に從はせるのでせう。其の者が心に從うて見れば、益可愛くならざるを得んでせう。益可愛くなつて見れば、片時たりとも其傍が離

れられんでせう、片時たりとも其傍が離れられんとして見れば、夫婦にならざるを得んではありませんか。這麼知れ切つた事を、はっはっはっはっ。

雄　はっはっはっはっ、愛したから心に從はせる、心に從せたから益可愛くなる、可愛くなれば傍が離れられん、傍が離れられんから夫婦になる、那樣事をお前に習はうか。古里遠ならば然う輕々行かうけれど、春山優雄は人にも知られた京都で有數の紳士だ、其人が苟も召使風情と結婚が出來ると思ふか。名譽と云ふものが有るわ、德義と云ふものが有るわ、紳士には紳士の體面と云ふものが有るわ。お前と私とは少し身分が違ふのだから、はっはっはっ。

古　はっはっはっ、苟も結婚の出來んやうな下等極る召使風情に何で愛なすつた。

雄　うつ。　と塞る。

古　はっはっはっ、もう一遍、はっはっはっ、更に、はっはっはっ。重ねて、はっはっはっでせう。

雄　愛したが如何した！　設ひ召使風情たりとも愛すべき値が有るから愛したのだ。

古　是は更に笑はざるを得ません、はっはっはっ。愛すべき値あるものなら、乃ち結婚すべき値有るもの

でせう。

雄　うつ。　と又塞る。

古　度々で可厭になつたけれどもが、是非もう一つ、はっはっはっ。

雄　いや、違ふ！　愛するのは愛するの、又結婚は結婚で、自ら別問題だ。愛するといふ事は偶然で、結婚と云へば人爲的だ。設へば我々が恐多くも英國女帝ヴヰクトリア陛下を見染め奉るかも知れんよ。何と偶然だらうが。

古　寧ろぐうぜん絶後でせうな。

雄　偶然の事は人力に及ばんのであるから、之を以て其人を責める譯は無い。然し、結婚は人力に及んで居るのだから、是には斟酌が有る、又制裁が有つて、無法な事は出來ません。ロンドンの宮内省へ宛てゝ結婚の願書が差出せると思ふか。

古　うつ。　と塞る。

雄　春山優雄は京都有數の紳士、おはすは福富家の召使、どうも提灯に釣鐘で、此の縁は結びかねる、因

で諦めた。諦めたのは斟酌した所、諦めなければならんのは制裁の有る所だ。噫、諦めんと欲すれば愛ならず、愛せんと欲すれば紳士ならず。

古　先生進退維に谷る。

雄　其の胸中の苦しさは、古里、お前、幾許かと思ふ！

と思逼つて泣聲になる。

古　はい。

雄　さあ、笑へるものなら笑つて見ろ。

古　はい。

雄　さあ、いくらでも笑ふが可い。

古　はい。

雄　笑へと言ふに！

古　どうも可笑くもないものに笑はれんです。

雄　可笑くなければ、悲く思ふか。

古　はい。

雄　悲しいか。

古　はい。先生の事を想ひますに就けて、自分の事が悲くなります。

雄　悲しければ一所に泣くが可い。

古　それほどでもありません。

雄　噫、然うでない、もう悲むまい。喜怒哀樂愛惡欲は一時の感情に過ぎんのだ、僅一時の感情の爲に紳士の德を傷けるには忍びんから、如何にも諦めたが、彼の事は諦めたが、唯氣に懸るのは那の形話、此の意が解けたら、それで思置くことは更に無い。是一つが煩惱の種だなあ。

と又例の復習を始める。

古　はっはっはっ、何の彼のと言うて、其實紳士の德は傷だらけなのでせう。先生、此は往來中の而も靑天白日の下です、其の態は餘り紳士の體面に關せん事も無いやうです。えゝ、先生、もう大概にな

さいませんかね。あっあっ、前面から人が來ますがな。

優雄は前後不覺となつて其にばかり身を入れて居る。

古　先生！　さあ、もうお止になりませんか。傍で恁う拜見して居るやうな、お待ち申して居るやうな、甚だ要領を得ん者が此は一人出來て了うたではありませんか。何分此者の處置に困るのです。よう、數を遣るゝ中に段々熟練して、輕妙なものですな。是は面白い！　唯居るのも無聊ですから一寸拜見。

と手早く鞄を開きて双眼鏡を取出し、

古　之を逆にして遠くに見るのも亦一興。

と彼邊此邊に當てゝ優雄の姿を覗きながら、

古　ほう、小い。小い癖に高慢な顏をして、おう、盛に手を動かす、動かす、首を掉る。宛然一匹の蟲が腕くが如し。顯微鏡檢査の結果戀のバクテリアは發見されたり！　如何です、先生。面白い〳〵、ちと御覽になりませんか。双眼鏡は倒に見るに限るですな。

優雄は豁然とした顰梅で丁と横手を拍つ。

古　いよう、次なる藝道ですな。

雄　讀めたぞ！　古里、解つた！

古　おゝ、眞向々々。然し、好男子さな。

雄　何をして居る！

と矢庭に眼鏡を引手操る。

古　はつ、其處にお在でしたか。

雄　何の事だ。

古　如何でした。

雄　少し解つたぞ。

古　見えましたか！

雄　何が？

古　何ですか。

雄　何だ！　暗號電信の小口が解つたと云ふのだ。

古　それは結構です。伺ひませう、今度は伺ふのです。

雄　何爲今度だ。

古　いや、餘り退屈しましたから今まで其處等を眺めて居つたのでした。

雄　漸く首の方だけ解つた。恁うだて、包の中は砂糖だらう、それを三度振つた、で、是がふるさとう三だ。

又二度振つたから、二だ。ふるさとう三二は如何だ。

古　古里さんにですか、なつ、なつ、黄なる絹にして幼き婦なる哉。なつ、なつ。

雄　それから、兩手で恁う腭の下を劃るのは、是は（首たけ）に極つて居る。首たけの下の句は惚れたと云ふやうな事に極つて居る。それ、地を掘る狀だから、ほれる歟ほれた歟だらうけれど、其跡を眺めて、一寸首を撚るのが、どうも解らんよ。

古　なつ。ほれた跡を眺めて考へるのですな。

雄　然う、なあ、首たけ惚れた後を能く見て考へるかな。

古　と先づして措いて、其先の根つては一つ投げ、二つ投げは何云ふものでありませう。

雄　惚れた跡を能く見て考へれば、ちぎつてから投げられる？

古　投げてから味噌を付ける。

雄　眞面目に〳〵！　恁つと、投げたのを結ばうとして、結ばれんと。

古　結ばれんから考へたのですな。

雄　おゝ、然うだ、ちぎりが結ばれんと解くのだ。

古　然うすると、彼の投げたのゝ始末が付かんぢやありませんか。

雄　始末が付かんから投げて了つたのさ。

古　眞面目に〳〵！

雄　全く投げる處には意味は無いので、結ぶ爲に二つ根つて見せたに違無い。然う、投げると解釋するから惡い、二つ根つたのだ。

古　それで義理明晰と成りました。因で、其を考へたのは……前に一度首を撚りましたな。

雄　前に撚つたのを考へると解いて見ると、今度のは又考へるでは當らんね。

古　始は撚つて考へた、今度は考へて、考へて、考へて、考へて、拔いて、考へが付きませんな。

雄　契が結ばれん……結ばれさうなものと工夫をした？　工夫をしてから後を見ると、はつと小膝を拊つて考付いた、とする。何と無く解つて來たやうだな。首から一つ遣つて見やう。

古　讀書百遍義自ら通ずです。私もお手傳しませう。

雄　善し。ふるさとう三二、

古　首たけ。此までは完全無缺なものです。

雄　首たけほれた跡を能く見て考へれば、……首たけ惚れた……古里、首たけ惚れたよ！　他る首たけ惚れて居たのか、おゝ、然うか、然うであつたか。然うであつたらう、然うであつたらう！　然う想はんではなかつだけれど、然うとお前の胸を聞くのは今が初發だ。好く言つてくれだ辱い！　難有い！　嬉い！　謝す！　あゝ、それで滿足した！

古　お靜に願ひますよ、先生。

雄　靜にしては居られん、他も首たけだとよ！

古　解つて居ります。

雄　あゝ、昨夜だ、是限お目に懸りませんでも、之を御緣に私は陰ながら貴方の健康を屹度祈つて居ります から、と顏を背けてほろりと泣いたぢやないか。那の姿は今も目前に隱顯して居る。未だ其ばかりではない、明日還ると言つた時には、物も言はずにわつを泣伏した。那の聲は今も耳に付いて居る。唯戀意になつた丈の間で、是限逢はんでも陰ながら貴方の健康を屹度祈るなどゝ云ふ語が出るものではない。縱し語は出でても、那のほろりが出るものではない。假にほろりは出るとしても、那のわつと泣伏せるものではない。古里、彼は全く首たけ惚れて居たのだよ。

古　解つて居りますと言ふに。

雄　あゝ、不愍なものだ。今頃は如何して居るか知らんな。定めて蜜柑の液も喉へは通るまい、而して泣いてばかり居るだらう。泣くな、よ、泣くな。何事も是までの緣と諦めるより外は無い、然う泣いてくれるな。さあ、もう〳〵泣くなよ。

と吾を忘れて古里の傍へ寄行く。

古　私は泣きは爲んです。先生、貴方こそ涙が出て居りますが。

雄　出て居ては惡いか。

古　それは御自分の物を御自分がお出しになるのですから、可然くお取計になるが宜しいであります、けれども、（首たけ惚れた）までは解つたにした所で、未だ其の先が有ります、而も運命は其の先に因つて決せらるゝので、今は涙よりは智慧をお出しになる可きです。

雄　其は知つて居るけれど、智慧を出して居る中に涙が出て來たのだ。涙の方は液體だから、どうしても出が善い。智慧となると、結晶して居るのを碎いて、其を鎔して搾るのだから。

古　では、搾り立の溫いところで更に一つお考へなさいませ。

雄　善し、それぢや大に搾るぞ。

古　米柑汁などをお入れにならんやうに。

雄　何を？

古　いや、首たけ惚れた跡を能く見て考へれば、契が結ばれん……かう工夫をしたか。

雄　如何にも接續が悪いな。首たけほれた……ほれて……ほれて見たが。

古　様子が悪くなつて来たですな。

雄　ほれて居る、ほれては居るが、然うだ、居るがと解くのだ。掴つた跡を眺めて、ほれては居るがと首を撚つたのは面白い。此が一寸働いて居るぢやないか。

古　そこよりは鍬を持つた所の方が覓に働いて居ります。

雄　眞面目に〳〵。惚れては居るが、契の結ばれん……と考へた、……結ばれんのを苦にして居ると、後から……後から、

と頬に膝を拊つて、

雄　おゝ、然うだ？　合點が行つた？　讀めた？

と色々に言試るのを、履違へて、

古　解りましたか。

雄　未だ〳〵。と又膝を拊つて、

雄　解つた？

古　いよ〳〵解りましたか。

雄　未だ〳〵。後から解る？　と云ふのかな。契の結ばれん、……結ばれさうなものと工夫をして、……契の結ばれん……譯は？　譯は、譯は、あつ、結ばれん譯はと解くのだ。譯は後から解る。是で善い！

古里、悉皆解つた。

古　未だ〳〵。と傍目も振らずに獨り爲形をして居る。

雄　此方で解つたのだ。それ、此の通、一寸見てくれ。

と是より爲形まじりにて、

雄　ふるさとう三二、首だけ、ほれては居るが、ちぎりの結ばれぬ其の譯は、後から解る、は甚麼ものだ！

古　正に！

雄　是に違無いと爲ると、其譯は後から解るが氣になるな。何爲契が結ばれんのだらう、而して何爲又後